

2020年12月1日

みずほディーラーズアイ (2020年12月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 102.00 ~ 106.50

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

■ 先月の為替相場

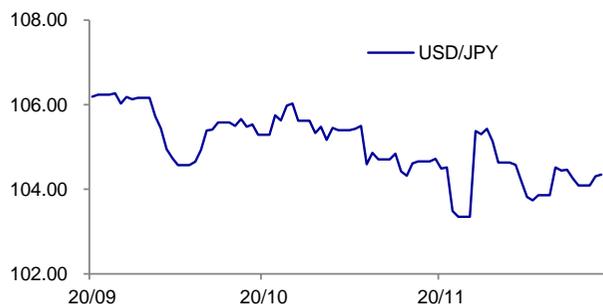
先月のドル円相場は、月上旬の米大統領選の投票をにらみながら104円半ばを挟んで上下に揺さぶられる展開。新型コロナのワクチン開発進展期待からリスクオフが後退し105円半ばまで上昇する場面もあったが、月後半にかけては欧米での新型コロナ感染者の再拡大や米金利の低下、次期米大統領のバイデン政権移行の過程で閣僚人事への警戒感も燃るなかでドル円は上値重く、次第に下値を切り下げる展開となった。米大統領選を控えた3日はポジション調整からドル売り先行し104円半ばまで下げるも、4日に開票が進み、市場予想に反してトランプ氏が優勢との報道が伝わりドル買いに転じ、ストップも巻き込みながら105.35円まで上昇した。しかし、その後バイデン氏優勢との報道にドル買いも一服し、加えて4・5日に行われたFOMCでは市場予想通り、金融政策の現状維持が決定し、「コロナの再流行と懸念」との見方が示されリスクオフのドル売りが強まる展開に、6日に一時103.18円まで下落し月安値をつけた。しかしその後は米10月雇用統計の市場予想を上回る内容を受けて103.70円台まで反発し、また米大統領選の開票が進みバイデン氏が勝利を確実にしたこと、新型コロナワクチンが治験において高い効果を示したとの報道等を受けてリスクオンムードの中、米株が急上昇も横目にドル円は105.64円まで上昇。10日には本邦企業実需のドル売りに押され東京時間に104.80円台まで下落する場面があるも、11日は欧米株の堅調さや米金利上昇から週高値の105.68円まで反発。12・13日は特段の材料に乏しくドル売りのフローが目立つ中104円半ばまで下落。16日は新型コロナワクチン開発をめぐる追加のポジティブヘッドラインに再び105.13円まで上昇するも、米経済指標の冴えない内容を受けて反落。その後は新型コロナの感染拡大が改めて意識され、リスクオフが強まる中18日には103円後半まで下落。19・20日もリスクオフムードの中、103円後半でのみみ合いを継続。23日は米11月各種PMIが予想を上回る好結果となったことを受けて104円後半まで上昇するも、バイデン政権高官人事が明らかになる中様子見感からドル買いも続かず、104円半ばまで弱含み。24日は米9月ケースシラー住宅価格指数の市場予想を大幅に上回る結果を受けて104.76円まで上昇も、上値重く104円前半まで下落。25～27日は米感謝祭前後で控えて終始動意に乏しく104円半ばから前半にかけてじりじりと下値を切り下げる展開。月末30日は本邦企業の実需の円転フローが優勢の中103円後半まで下落する展開となった。

■ 今月の見通し

今月のドル円相場は総じて上値の重い展開を予想。新型コロナワクチン開発の進展期待というポジティブ材料はあるものの、足元経済減速に対する即効性が明確に窺えない中では、目下欧米を中心に再拡大している新型コロナ感染による景気減速懸念が依然リスクオフ材料として引き続きドル上値を抑えよう。なお、先月は米株が急上昇する場面があったものの、米金利上昇幅は限定的でドル円の上値は重く推移したことが印象的であった。コロナ感染者の拡大や相次ぐロックダウンや外出規制の再強化により消費者心理は依然として冷え込んだままであり、実態経済と金融市場の乖離が意識され、今後市場の期待感剥落にも警戒感が漂う。また、コロナ対策として膨らんだ米ドルの供給過剰感、巨額の米財政赤字を懸念したドル売りもドル円には重くのしかかる。指標としてはドルインデックスも足元、2018年4月以来の低水準を付けていた9月1日のレベルに迫る水準まで低下しており、相対的にドル売りが強まっていることが意識されよう。また今月は重要イベントとして、10日ECBに加え、15・16日のFOMCと、年内最後の主要中銀金融政策決定会合にも注目が集まる。FOMCにおいては引き続き2023年末に至る長期のゼロ金利政策の維持が見通されるほか、直近では国債買入増額の憶測もあることから、追加緩和乃至はハト派寄りフォワードガイダンス等示されれば米金利の低下圧力→ドル売り材料となろう。もともと、ECBについてもラガルド総裁が直近の講演などで今月ECBでの追加緩和を仄めかしており、このところ堅調に推移するユーロの上昇が抑制され、これまでのユーロ買い・ドル売りの動きが巻き戻される展開には留意したいところ。なお、次期米大統領のバイデン政権については移行手続きを開始し、次期高官人事にも注目が集まっており、財務長官についてはこれまでブレイナードFRB理事の任命が取り沙汰されドル安材料となってきたが、直近ではイエレン元FRB議長との線が濃厚となり過度な警戒感も薄れている。ただし、足元新型コロナの感染再拡大の影響に鑑みれば、いずれにしても財政拡張路線を強化していく見込みが強く、ドルの上値は引き続き重く推移するものと考え。年末にかけてはこうしたリスクオフ材料と年末年始のフラッシュクラッシュ等を意識しつつ、ドル円は次第に下値を切り下げる展開を予想する。

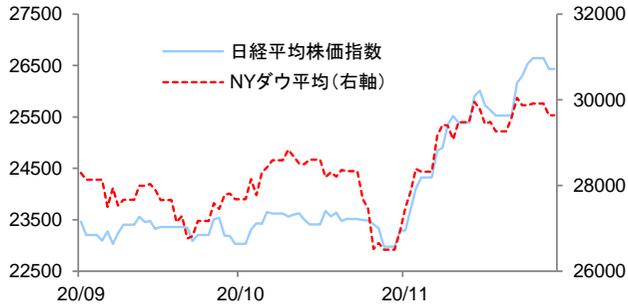
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/3	米大統領選挙	-	-	-	-
11/4-5	FOMC	-	-	-	-
11/6	米非農業部門雇用者数変化	10月	580K	638K	661K
11/6	米失業率	10月	7.6%	6.9%	7.9%
11/14	ミシガン大学消費者マインド	11月	82.0	77.0	81.8
11/17	米小売売上高 (速報、前月比)	10月	0.5%	0.3%	1.9%
11/20	米中古住宅販売件数	10月	6.47m	6.85m	6.54m
11/25	米耐久財受注 (前月比)	10月	0.8%	1.3%	1.9%
11/25	米GDP (年率/前年比)	3Q	33.1%	33.1%	33.1%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	8名	106.00 ～ 103.00	ベア	13名	105.50 ～ 102.00
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

田中	ベア	106.00 ～ 102.00	コロナ感染拡大懸念はワクチン配布開始観測もあり相場への影響は限定的。ドル円は新規材料難に足元のドル売り・円売り綱引きながら上値重い相場展開の継続を想定。FOMCは資産購入ガイダンス強化に注目もドル売りの流れは変わらず。
竹内	ベア	105.50 ～ 102.50	米大統領選挙、コロナワクチンへの期待と不透明感は徐々に払拭されつつあるものの、流動性供給を背景にドルの余剰感は強いと見る。本邦輸出企業、機関投資家等の売り意欲も旺盛で上値は抑制的。
筒井	ブル	106.00 ～ 103.00	次期財務長官にイエレン氏が就任することに注目。氏の基本スタンスであるドル高を市場は織り込むこと、これまで以上の財政・流動性供給は限界でマネーサプライが頭打ちとなること、を材料にドル高に反転する可能性が高い
加藤	ブル	106.50 ～ 103.00	米国新財務長官がイエレンとなること、新型コロナワクチン接種が始まること、投機筋の目線が円高に傾きすぎていると思われること、当局もドル/円が100円方向に向かうことは歓迎しないであろうこと。以上により円安を予想する。
山岸	ベア	105.50 ～ 102.00	ドル・円ともに同じ方向で売買されやすく、ドル円では動きが出づらいう展開。米国でのコロナ感染再拡大による景気への配慮、財政拡張に伴う金利上昇リスクへの対処から、FRBは米金融緩和モードを当面継続。ドル安地合いは続く予想。
牛島	ブル	106.00 ～ 103.00	今年は過剰流動性を背景にドルショートポジションに偏っていたが、年末を前にドルが買い戻される展開を予想。103円台前半では当局の牽制も警戒される中、円高余地は限られるだろう。
田坂	ベア	106.00 ～ 102.00	FRB金融緩和スタンス継続の状況下、引き続き株高・ドル売りの展開を予想。欧米ではクリスマス休暇が本格化する状況下、マーケットの流動性が一段と低下するため、荒い値動きには注意が必要。
尾身	ブル	105.70 ～ 103.20	緩やかなドルの買い戻しを予想。背景は、低金利政策の長期化、追加の財政政策への期待、堅調な米株相場など。月半ば頃までクリスマス前の取引が集中する中で、ドル高方向への相場の進行を予想している。
上野	ベア	105.00 ～ 101.00	コロナ禍における流動性供給・財政出動に伴い、株式市場に資金流入が続き、為替市場では余剰感のあるドルが売り圧力に晒されている。転換点となるイベントにも乏しくドル円は上値の重い展開継続か。
山口	ベア	105.50 ～ 102.00	世界的な新型コロナ感染者、入院患者の拡大を受けたリスクオフ相場が継続すると予想。米国では労働市場の回復の遅さも目立ち始めており、さらにFRBによるフォワードガイダンスの強化が期待される。ドル安トレンド継続を予想。

甲斐	ベア	105.00 ～ 102.00	米国のコロナ感染拡大ペースが鈍化し、ワクチン配布に関するニュースフローが継続するものの、実際の配布時期を踏まえるとFOMCの緩和スタンスは継続・米金利は上昇できないと予想。実需の円転が意識され、上値の重い展開が続くと予想
小野崎	ブル	105.00 ～ 102.00	広がるコロナ感染・日米金利差縮小・FRBの緩和姿勢など積極的なドル買いは見込まないものの、短期的には積みあがった円買いポジションが年末にかけて巻き戻されることが想定されることやコロナワクチンへの期待もあり下値は限定的か。
玉井	ベア	105.50 ～ 102.50	次回FOMCで買い入れ年限長期化等が議論される可能性があり、FRBの緩和姿勢が続くことが確実な中、ドル安地合いは継続しそう。ただ新型コロナウイルスワクチンへの期待もあり、ドルも円も売られやすく値幅は限定的だろう。
原田	ベア	105.50 ～ 102.50	新型コロナウイルスの再拡大は懸念材料。米国をはじめ欧州各国で感染が続く中、経済の回復は遅れそう。かかる中、FRBによる緩和が続く限りにおいては、ドルは軟調に推移しやすい環境にある。
大庭	ブル	105.50 ～ 103.50	引き続き104円の心理的節目を維持したい思惑が錯綜。輸出企業も104円下回る水準では売り急ぐ様子ではなく、105円台回復を待っている模様。金利差なき状況下、円高方向への警戒は強いものの、下支えフローにより下値は限定的か。
上遠野	ベア	106.50 ～ 102.00	ワクチンの開発期待は燃えるものの、目下再拡大する新型コロナ感染による経済減速懸念が引き続きリスクオフ材料となる。併せて米国では当面金融・財政両輪での強い緩和策の継続が見込まれドル円はじりじりと下値を切り下げる展開か。
小林	ベア	105.50 ～ 102.00	世界各地で新型コロナウイルスの感染拡大が止まらない状況であり、引き続きリスクオフの展開を予想。特に米国においては雇用や消費の改見通しが立たず、積極的なドル買いの展開とは考えづらく、軟調な推移となるか。
逸見	ベア	105.50 ～ 102.00	ドルが過剰供給されている環境が大きく変わらない限り、ドル安圧力は根強く、ドル円は軟調な推移。低金利環境の継続が見込まれる中、103円台を割り込む展開に警戒したい。
大谷	ベア	105.50 ～ 102.50	米国でのコロナウイルス再拡大を受けた経済活動の停滞懸念は依然として根強く、FRBは先行きの見通しに慎重な姿勢は継続。そのような環境下で米金利は上昇を見込みにくく、ドル安地合いは継続することを予想。
鈴木	ブル	106.00 ～ 103.20	104円台を割る水準でサポートは依然として強く、大統領選直後に記録した下値を中々試せない展開が継続。過剰気味であったドルのショートポジションの一定程度の買戻しも想定され、上昇を予想。
大熊	ブル	106.00 ～ 103.00	米株は史上最高値を更新する強気相場の状況下で、バイデン時期大統領による財政拡大も株式市場には好材料となる為リスクオフのドル売りの地合いになりやすく、ドル/円は上値重い展開を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1875 ~ 1.2050
EUR/JPY 123.00 ~ 126.50

■ 先月の為替相場

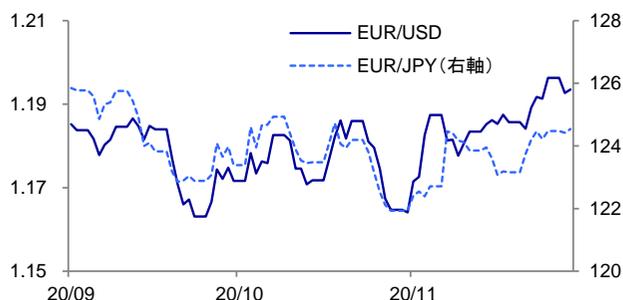
先月のユーロ/ドルは米大統領選後、ドル売りユーロ買いが優勢となり、月末には直近高値を更新し1.19半ばまで上昇する展開。月初2日、1.16台前半でオープンしたユーロ/ドルは、欧州PMIの結果が良好であったことや、米大統領選前の調整から株式市場が上昇する動きに1.16台後半まで上昇。3日もドル売り優勢地合いの中、1.17台前半までじりじりと上昇し、4日、バイデン候補の圧勝の観測から、1.17台後半まで値を上げたが、次第に接戦となる展開に、ドルが買い戻され1.1602まで急落したが、堅調な株式市場の動きに1.17台を回復。5日に一時1.1860につけるも、大幅に上昇していた米株が上げ幅を縮小する動きに1.17台後半まで反落。しかし、FOMC後のパウエルFRB議長の本派な記者会見を受け、再びドル売りが強まると、1.18台前半まで上昇。その後米大統領選でバイデン候補の勝利との観測が高まり、米政治の不透明感が後退、ドル売りが優勢となると一時1.1891ドルと9月15日以来の高値を記録。9日、ワクチン開発への期待感から1.1920まで上昇も、オプション絡みのドル買いが進むと1.18割れまで反落。10日は1.18台前半でのレンジ推移が継続。11日はラガルドECB総裁の追加緩和を示唆する発言等を受け、1.1745まで下落するも、新規材料に乏しい中1.18台前半での推移を継続。16日は1.18台半ばでオープン。日中韓を含む東アジア15カ国が地域的、包括的経済パートナーシップ協定に署名したことで、リスクオンのドル売りが入ると、ユーロ/ドルは堅調に推移。その後、ワクチン開発進展の報道を受け、米金利が上昇したことでドル買い地合いとなると、1.1815まで下落。17日、リスクオンの流れから高金利通貨である中国元に対しドルが売られたことや、債券等の欧州通貨が強含む中、1.19台手前まで上昇。18日、ワクチンの有効性を示す報道によって、再び米金利が上昇する展開に、1.18台半ばまで下落。19日、コロナ感染の再拡大が懸念され、ユーロは上値重く推移し1.18前半まで下落。その後「23日にEUと英国が貿易合意を発表する可能性がある」との報道を受け、ユーロは1.18台後半まで上昇。東京休日の23日は良好な米経済指標を受けてドル買い戻しに一時1.1800まで反落するも、底堅く1.18半ばまで戻す。24日は独第3四半期GDP確報値が予想を上回ったこと等を背景に1.19手前まで上昇。25日、1.1930まで上昇し、翌日の感謝祭を控え1.1920付近の推移が続いた。26日、FOMC議事要旨を受け12月16日のFOMCで量的緩和が強化される観測が市場一部で強くなったこと等を受け1.1941までユーロ買いが進んだ。週末は前日高値を抜けると1.1962まで上昇し、同水準で越週。

■ 今月の見通し

緩見込の12月ECB政策理事会の内容には注目が集まるが、足許のEUR高の流れを抑え込む程の結果とはならず、寧ろ緩和長期化が示唆されたFOMC議事録を受けて、底堅い推移が継続か。一方で足許の1.19台が18年5月以来の高水準であり、1.20台への心理的節目を越えるためには更なる新規材料が必要であろう。上値を何度も探る展開後、1.20台半ば付近をつけて、買い一巡後は年末のポジション調整から1.19半ばまで戻すような推移を予想。10日の12月ECB政策理事会の緩和約束は既定路線。ラガルドECB総裁及びチーフエコノミストであるレーンECB理事が相次いでパンデミック緊急購入プログラム(PEPP)やターゲット型長期流動性供給(TLTRO3)の強化を示唆したため、議事録発表にも何らサプライズは無く、1.19台を底堅く推移している。とは言え12月会合に関して追加緩和が見込まれるのは日米欧でECBのみであり、金融政策に関する年内最後の注目イベント。レーン理事が政策運営の核心を握っているとの声もある。記者からの「PEPPを止める基準をどう考えるのか」との問いに対し、レーン理事は「一定の条件が満たされるまで、PEPPは停止しない」と回答。「一定の条件」が知りたいわけだが、これに関しては「第一に、パンデミックが経済活動を妨げないこと。景気回復とインフレ動向を判定する基準も設定しなければならない。」としつつ、後者の論点は「まだ考えるのは早い」と整理している。その他、次回会合のヒントになる部分としては「PEPPは2021年6月末まで続くように設計されているが、我々は常に危機局面が終わるまでは続けると述べてきた」と述べており、これは6月末の期限が最低でも12月末まで延期されることを示唆しているだろう。ドルが相場の潮流を明確に作る状況でECBがいくらか緩和しても自国通貨高に対して「焼け石に水」となりやすい。緩和予告をしている以上、市場はこれを十分織り込んでいるであろう。10日のECB政策理事会はかなりはっきりと市場期待を超えてこない限り、逆にユーロ買いを招きかねないという懸念がある。また10~11日にはEU首脳会議が開催予定であり、先週末再開したブレグジット交渉の行方にも注目。21年1月1日の完全離脱は間に合わないため、準備期間ないしは猶予期間等の言い回しを用いて3~6ヵ月の移行期間が設定される可能性は高い。報道をみるに尚も交渉は難航している様子だが、一歩ずつ進捗していくことは、これまでの値動きからするとEUR買い方向とみて良いだろう。心理的節目の1.20を試す展開が今月のテーマとなりそうだ。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/10	独ZEW景気期待指数	11月	44.3	39.0	56.1
11/10	欧州ZEW景気期待指数	11月	-	32.8	52.3
11/13	欧州GDP(前期比/前年比)	3Q	12.7%/ -4.3%	12.6%/ -4.4%	12.7%/ -4.3%
11/23	欧州マークイット製造業PMI	11月	53.2	53.6	54.8
11/23	欧州マークイットサービス業PMI	11月	42.0	41.3	46.9
11/23	欧州マークイットコンポジットPMI	11月	45.6	45.1	50.0
11/24	独IFO指数(企業景況感/期待/現況)	11月	90.2/93.5/87.5	90.7/91.5/90.0	92.5/94.7/90.4
11/26	独GfK消費者信頼感	12月	-4.9	-6.7	-3.2

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	12名	1.2100 ～ 1.1800	ベア	9名	1.2050 ～ 1.1650
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

田中	ベア	1.2100 ～ 1.1700	ユーロドルは、コロナ感染拡大やEU予算協議とBREXIT交渉の難航と欧州からはネガティブな材料が多いが、ドル売りと需給が勝っている状況。ドル売り地合い継続予想も水準感やECBからの通貨高牽制懸念に上値は限定的か。
竹内	ブル	1.2200 ～ 1.1700	欧州におけるコロナ感染拡大状況、ECBの金融政策に鑑みるに、ユーロの上値を積極的に買う材料には乏しいものの、根強い余剰感を背景としたドルの地盤沈下に伴い、ユーロの相対的なポジションは上昇か。
筒井	ベア	1.2100 ～ 1.1600	ECBによるイールドカーブのスティープ化阻止への強い意向(レオン理事)と、経済悪化リスクが燦る中財政拡大できないことを起因とするソプリリスク・資金調達環境の悪化懸念を市場は改めて織り込みに行くだろう。
加藤	ベア	1.2050 ～ 1.1600	不完全ながらも米国で新型コロナワクチン接種が始まることはドル支援材料、当局もこれ以上のユーロ高はけん制してくる可能性が高いと予想する。
山岸	ブル	1.2100 ～ 1.1800	ドル安相場の中、需給面などから受け皿としてユーロが選好されやすい。足元の上昇トレンド継続、直近高値1.20レベルを試す展開を予想。ECB追加緩和は織込済み、当局者からのユーロ高牽制と英EU離脱交渉は波乱材料として警戒。
牛島	ベア	1.2000 ～ 1.1600	欧州ではコロナ拡大懸念が燦る中ユーロの上値は重い。米国でのワクチン開発に進展が確認できるとドル買いが活発化する可能性も残る。年末前に溜まったユーロロングの調整から、ユーロが売られると予想。
田坂	ブル	1.2100 ～ 1.1800	欧州各国におけるコロナ感染者数拡大深刻化を背景に欧州圏経済回復鈍化が予想される状況下、積極的なEUR買いは考え難いものの、ドル安地合を強力なサポート材料に上昇トレンド継続を予想。
尾身	ベア	1.2000 ～ 1.1700	EUR高が抑制された状態が継続すると予想。ECBによる追加緩和への期待からEURの上値は抑えられるのではないだろうか。
上野	ブル	1.2200 ～ 1.1700	ブレグジットについては欧・英ともにコロナ禍の経済への負の影響を回避したいはず(≒合意なき離脱は起こらない想定)。ドルの軟調地合いは転換点を見出しづらく、相対的にEURが強含み展開になるのでは。
山口	ベア	1.2050 ～ 1.1650	ドル売りの流れを受けEURは上昇を続けたものの、欧州での新型コロナ感染者の拡大、さらにECBによる追加金融緩和観測も燦っており、EUR上昇の調整が入ると予想。

甲斐	ブル	1.2100 ～ 1.1900	感染拡大が続いていた欧州だが、徐々にロックダウンの効果が現れ、ドル安局面での相対的なユーロ買いが進むと予想。1.2の節目を超えるかと予想する。
小野崎	ベア	1.2050 ～ 1.1600	緩和見込のECBや2021年以降のMFFに関するEU予算協議が難航しそうな状況にEURは上値重い展開を予想。積みあがったドル売りポジションが年末にかけて巻き戻されることも想定され節目となる1.20を前に上値の重い推移か。
玉井	ブル	1.2100 ～ 1.1750	次回ECBで追加緩和を行う予定だが、市場では既に織り込み済みであり、むしろ期待したほどの内容ではない場合、ユーロ高に繋がるだろう。ECB関係者によるユーロ高牽制には注意が必要だが、ドル安地合は継続すると考える。
原田	ブル	1.2100 ～ 1.1750	欧州においても新型コロナウイルスの感染拡大が続いているものの、ドル安局面が続く中において、消去法としてユーロ買いとなりやすい環境。ECBによる追加緩和も織り込み済みであり、上昇トレンドは続きそうだ。
大庭	ブル	1.2050 ～ 1.1875	緩和見込の12月ECB理事会の内容には注目が集まるが、足許のEUR高の流れを抑え込む程の結果とはならず、寧ろ緩和長期化が示唆されたFOMC議事要旨を受けて、底堅い推移が継続か。心理的節目の1.20を試す展開がテーマか。
上遠野	ベア	1.2100 ～ 1.1800	足元ドル安地合いを受けユーロ高が進んでいるが、新型コロナ感染者の再拡大に伴う外出規制等、欧州も経済減速が懸念される中では基本的にユーロ上値も重いものと考ええる。今月のECBにおける追加緩和の憶測にも注意したいところ。
小林	ブル	1.2100 ～ 1.1750	12月に予定されているECB理事会における追加緩和はすでに織り込みと考えられ、ドル売り局面において相対的にEUR買いを想定。一方で、コロナ感染拡大が止まらない状況であり、積極的なEUR買いは考えづらく、上げ幅は限定的か。
逸見	ブル	1.2200 ～ 1.1800	英・欧州の貿易交渉やコロナ感染の再拡大などの不透明感は払拭できないものの、ドルの過剰感が継続する中、消去法的にユーロが買われる展開を想定。
大谷	ブル	1.2100 ～ 1.1800	ドル売り地合いが継続する中、受け皿としてユーロが買われる展開が続くと予想。また12月ECB理事会における追加緩和期待についてはある程度織り込み済みであると考ええるとユーロは引き続き底堅い推移を予想する。
鈴木	ベア	1.2000 ～ 1.1700	欧州全体でのコロナウイルス患者の拡大懸念は依然として大きい。大統領選後拡大した、ドルのショートポジションも、年末に向けて一定程度買戻しの調整があると考えられ、上昇は考えづらい。
大熊	ブル	1.2100 ～ 1.1750	新型コロナ再拡大が懸念されるものの、ワクチン実用化への期待は継続し、また、ECBによる金融緩和措置の増強が有力視されていることも市場には好感されることから、ユーロは上値を試しやすい展開を予想。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2800 ~ 1.3600
GBP/JPY 130.00 ~ 145.00

欧州資金部 神田史彦

■ 先月の為替相場

先月のポンドは上昇。世界的なドル安が主な背景。月初は米大統領選結果を控えて2日こそ対ドルで1.2854の月中安値をつけるも、バイデン氏優勢が伝わる中、ドルが世界的に売られると3日には早々に1.30台を回復。5日には英中銀が量的緩和規模の1,500億ポンド拡大を決定したが、政策金利据え置きが満場一致であったこともあり結局ポンド買いの反応。そのような中で翌週に入ると、今度は新型コロナワクチンの開発についてのポジティブなヘッドラインでリスク資産買いとドル売りが強まるとポンドは1.32台後半まで上伸した。11日に1.33台をつけた後はいったん売りに押される。同期間で英首相側近2名が辞任したことが背景であった可能性はあるが、同側近がいなくなったことが貿易協定の妥協への布石ではないか、との見方も市場では根強く1.31付近を底に再び反転。16日の週は、また新型コロナワクチン開発のヘッドライン(前週とは別会社)でドルが売られる中、ポンドも反動で買われる。19日にEU首脳会合を控えた合意期待は、どちらかというポンド買い材料というよりはポンド買いを阻害しなかった、との印象。結局、交渉自体は交渉担当者の中に新型コロナ感染者が出たとのことで交渉は中断となった。23日の週は通商合意期待が続く中、ポンドは1.33台の推移が続いた。最も23日には新たな新型コロナワクチンのヘッドラインで市場はリスク選好となる中で、米11月製造業PMIが市場予想を上回ったのを契機にドルショート巻き戻しが起こり1.32台半ばへ下落する場面もあったが、もみ合いの中、26日には月中高値1.3399をつけた。最後の週末28日からはEUバルネエ主席交渉官が英国入りし交渉をすることを前に英・EU双方から牽制発言が出る中で、ポンドは対ドルで1.33台で推移しながら月末を迎えた。

■ 今月の見通し

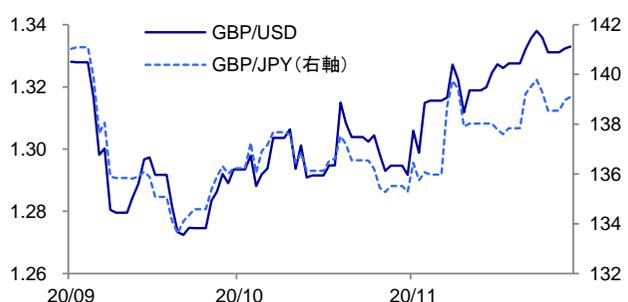
引き続きテーマは新型コロナに懸るドル需要とブレクジットか。新型コロナについては、ワクチン開発の好結果が相次いで報道されていることで先月は世界的にドル需要が下がったこともありポンドは反動で買われた。ただ、实体经济の回復への影響度合いが不透明であることもあり更なる相場変動に移行するまでに至っていない。殊更、ポンドについては来るブレクジット移行期間終了の12月末が迫り、貿易協定の締結に向けて期待感が増しているものの、ポンドを積極的に買い持ちできる状況かと言うとやや疑問だ。ポンドの対ドル水準は既にコロナ第1波時のレベルは回復しており、やはりここからさらにポンドが上昇していくシナリオは描きにくい。仮にEUと何らかの合意をした場合も、初動こそポンド買いは見られると思われるが、ブレクジットの今後の英経済への影響に鑑みるとその上昇が持続するとは考えにくい。どちらかという交渉決裂時のポンド下落リスクに注意が必要か。なお、英国のロックダウンは予定通り2日で終了となり再び地域ごとをレベル分けにするシステムへ移行する。2度目のロックダウンでは今年の春とは違い工場を閉じた製造業は少なかつたと見受けられるが、もし今後3度目のロックダウンの可能性が出てくるとその限りではないだろう。最もそれ自体のポンド相場への影響は限定的となるが、英中銀の政策への影響を通して影響が及んでくるだろう。2020年の英成長率は英財務省の見通しでは11.3%縮小と実に300年ぶりの下落幅となるようで、予算も債務比率をGDP比19%とする模様。英中銀は既に11月にも量的緩和規模を拡大しているが、財政と歩調を合わせるべく更なる拡大を見る向きが多い。17日の政策委員会では、一部で量的緩和規模の拡大が見込まれる一方で、現行0.1%の政策金利を下げることは見込まれていない。9人の委員の票がどのように割れるかでポンドが影響される可能性がある。

『当地の年末年始の過ごし方』

英国では他の欧米諸国と同様に、クリスマス休暇で多くの人が実家へ帰省し家族と過ごすのが一般的だ。そもそもロンドン市内でも24日の夜から公共交通機関が運行を止めるため、街に繰り出せなくなる。25日はクリスマスの祝日、翌26日はボクシングデイの祝日で街中のお店でセールが行われる。一方で大晦日～正月にかけてはとでも慌ただしい。基本的に大晦日も仕事があるため普通に働き、同僚らへ1年の感謝を伝え帰社。元旦はさすがに祝日となるが、翌2日には通常業務へ戻るため新年を迎えた実感が薄いのが正直なところだ。そして、これもニューヨークの新年カウントダウンは有名だが、ロンドンにおいても大晦日は多くの人々が街中へ繰り出しテムズ川の火花を見ながら新年を祝う。正直なところ、のんびりとした日本の年末年始の過ごし方を恋しく思ってしまう今日この頃です。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	製造業PMI	10月	53.3	53.7	53.7
11/4	サービス業PMI	10月	52.3	51.4	51.4
11/5	建設業PMI	10月	55.0	53.1	56.8
11/5	政策金利		0.1%	0.1%	0.1%
11/10	ILO失業率	9月	4.8%	4.8%	4.5%
11/12	GDP(前期比)	3Q	15.8%	15.5%	-19.8%
11/12	鉱工業生産(前年比)	9月	-6.0%	-6.3%	-6.4%
11/18	消費者物価指数(前年比)	10月	0.5%	0.7%	0.5%
11/20	小売売上高(含自動車/前年比)	10月	4.1%	5.8%	4.6%
11/23	製造業PMI	11月	50.5	55.2	53.7

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7140 ~ 0.7460
AUD/JPY 73.70 ~ 78.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

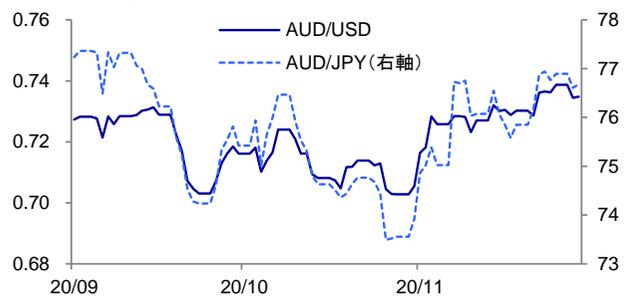
11月を通して豪ドルは上下振幅しながら上昇、月末にかけては0.74手前まで上昇した。第一週目、豪中関係が悪化する中、銅や砂糖も中国の対豪輸入制裁品目へ追加との報道で一時0.70割れ。3日RBAは政策金利と豪3年国債利回り目標を0.1%へ引き下げ、今後6か月で5~10年物国債を一十億豪ドルという比較的大規模、且速いペースでの買入れ実施を決定。4日、米大統領選を巡り荒い値動きとなり、0.71半ばから0.70半ばまで下落。但し議会選で共和党が上院の過半数を維持する見通しとなると大規模増税や規制変更がないとの思惑を背景に株価が続伸。株高・ドル安の展開に豪ドルも0.7280まで上昇。第二週目はバイデン氏による勝利演説が週末にあり、またワクチン治験結果に関しても朗報が流れ週明けはリスク資産が上昇。一時0.7340まで上昇した。11日、RBNZは政策金利を0.25%に据え置き。NZDが上昇すると豪ドルも連れ高となり0.7320手前まで上昇。その後はコロナ第2波への慎重姿勢が再び拡がると0.7220近辺まで下落も週後半に米S&P500が最高値を更新し0.7270まで戻した。第三週目は週初、堅調な中国10月鉱工業生産、RBA総裁が「マイナス金利導入の可能性は低い」と強調した事やワクチン治験結果の朗報にサポートされ0.7320近辺での底堅い推移となった。19日は豪10月豪雇用統計が予想比で良好な結果となり0.73台を回復。週後半は米追加経済対策の協議が再開され、またワクチン緊急使用許可申請も行われ、0.7320近辺まで上昇した。第4週は週初、堅調なNZ3Q小売売上でNZD急騰。豪ドルも連れ高となり、加えてコロナワクチンの朗報に0.73台半ばまで上昇。しかし堅調な米MarkitPMIを背景に大きくドルが買われ、0.7265近辺まで下落した。また、一層のドル安圧力がかかる可能性が懸念されていた次期米財務長官人事はドル高牽制者のブレイナード氏が最終候補者から外れ、イエレン前FRB議長が指名される予定と複数筋が語った事も一部ドルを支えた。24日、米連邦財産の管理維持を行う政府独立機関、GSAがバイデン氏へ政権移行を開始可能と書簡で通達した。大統領選の混乱で大きく後倒しされるとみられた経済回復支援策立案が今後再始動するとの観測でリスク許容度が改善。豪ドルは0.73台へ再度載せ。米ダウが3万ドルを突破し原油も上昇する局面ではリスクオンが強まり、0.7320から0.7370近辺まで上昇した。26日米国休場の中、市場参加者少なめ。月末絡みの調整が行き交う中ナローレンジで推移。米国が感謝祭休場明けに米株先物がやや上昇すると豪ドルも連れ高となり、0.74をトライも0.7399までとなった。

■ 今月の見通し

今月は先月末に失敗した0.74台を再度トライする展開に期待したい。調整を挟みつつも株高、ドル売りの流れが続くとみる。年末の調整フローが行き交うなか、来年への期待を反映した師走相場となろう。月初の主な経済指標予定は1日(火)中国11月製造業PMI、RBA理事会、豪7-9月期経常収支、2日(水)、豪7-9月期GDP、ロウRBA総裁議会証言、3日(木)豪10月貿易収支、4日(金)、豪10月小売売上、米11月雇用統計等の発表が予定されている。RBA政策金融決定会合においては金利据え置きで踏み込んだ追加緩和の示唆は特段ないとみる。故に豪ドルは売られにくいと予想する。但し、現在豪連邦政府は中国の関税制裁に対してWTOへ訴える方針を固めており、これに関するヘッドラインリスクには十分注意を払いたい。その他、米製薬会社のコロナワクチン接種が早ければ英国で12月7日から開始される可能性がある。また英製薬会社のワクチンの有効性証明の為の追加試験に関しても注目が集まる。豪VIC州では新型コロナ新規感染、新規死亡者がいずれも新型コロナ排除認定のベンチマークとなっていた28日間を継続してゼロとなり、ポジティブなムードが漂っているが、反対に米国NY州では新規感染者が4月以来の8,000人を超えたと発表。今後各社のワクチンの具体的な市場への供給時期に関しての朗報を待ち、更なるリスクオンフローに期待したい。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	住宅建設許可件数(前月比)	9月	1.5%	15.4%	-2.3%
11/3	RBAキャッシュレト	11月	0.1%	0.1%	0.25%
11/4	小売売上高(前月比)	9月	-1.5%	-1.1%	-4.0%
11/5	貿易収支	9月	A\$3700m	A\$5630m	A\$2618m
11/19	雇用者数変化	10月	-27.5k	178.8k	-42.5k
11/19	失業率	10月	7.1%	7.0%	6.9%

(資料) ブルームバーク

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2800 ~ 1.3500
CAD/JPY 76.00 ~ 83.00

米州資金部カナダ室 芦崎 瑞穂

■ 先月の為替相場

11月のUSD/CADは1.3316でオープン。月間安値は1.2929(11/9)、月間高値は1.3370(11/2)。世界的なコロナ感染拡大に歯止めはかかっていないものの、米大統領選挙結果の確定とワクチン開発により、全体としてリスクオン優勢の流れとなった。原油価格(WTI)は月初の1バレルU\$34から、24日にはU\$45超となった。11月前半は米大統領選の混迷等によりUSD/CADはやや変動があったものの、後半16日以降、USD/CADは1.29後半から1.31前半でのレンジ推移となった。3日、米大統領選におけるバイデン氏勝利を見越して、USD/CADは1.31近くまでUSDドル売りが進んでいたものの、3日後の開票作業で接戦が伝えられると、USDドルが買い戻され、USD/CADはオーバーナイトで1.330を付ける。4-5日のFOMC会合では、市場の予想通り政策金利は据え置き、現行ペースでの量的緩和政策を継続することが決定された。6日発表の米・カナダ10月の雇用統計は、ともに予想以上に堅調な結果となった。カナダ10月の雇用者数変化は8.36万人増と予想を上回り、失業率も前月の9.0%から8.9%へとやや改善。米10月の非農業部門雇用者数も前月比63.8万人増と予想を上回り、前月分は上方修正。失業率も6.9%と前月から1ポイント以上改善した。週末にバイデン氏当確の一報が流れたこと、また米製薬会社による、コロナワクチン臨床試験における高い有効性の発表により、9日にはリスクオンから米・カナダともに株式相場は大幅高。原油価格は急伸、長期金利も急上昇、USD/CADは一時1.2929まで下落。しかし足元では世界的なコロナ感染拡大は広がっており、週の後半にかけてWTIIは上げ幅を縮小、USDドルが買い戻され、13日にはUSD/CADは1.3173まで戻す。16日朝にはモデルナによる94.5%の確率で有効なワクチン開発のニュースによりリスク選好となり、米・カナダ株式市場は反発。カナダドル買い優勢となりUSD/CADは1.3066まで下落。18日、カナダ10月のCPIは、食品価格の上昇が寄与し前年同月比0.7%上昇、市場予想の0.4%を上回った。発表後カナダドルは上昇、一時1.3034付ける。しかし各地でコロナ感染拡大がハイペースで広がっており、同日午後にはNYの学校閉鎖などが伝えられ、リスクオフが再燃、株式は下落、USDドルが買い戻された。23日にはトランプ大統領が政権移行作業を承認したこと、また英製薬会社が有効性の高いワクチンを開発したとの発表により再びリスクオンへ。24日には、早ければ米国でワクチン接種が12月にも開始とのヘッドラインが流れ、NYダウは初めて3万ドルを突破、WTIIは1バレルU\$45を超え、USD/CADは1.2998でクローズ。その後も27日時点までUSD/CADは1.30前後での取引が続いている。

■ 今月の見通し

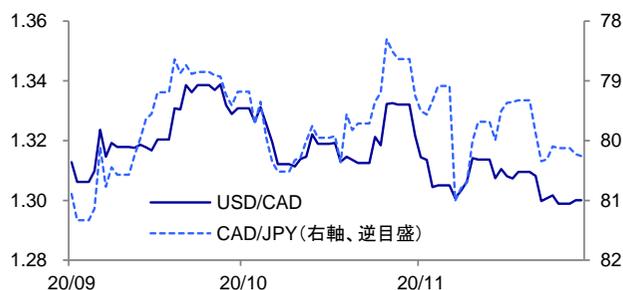
12月のUSD/CADは概ね1.29-1.34での推移を予想。12月9日にはカナダ中央銀行政策金利決定会合が、12月15日-16日にはFOMCが開催される。いずれも政策金利を含め、基本的な金融政策は維持されるものと思われるが、経済支援のため、資産購入プログラムを調整、強化する可能性は考えられる。コロナワクチン開発に関しては、早期にワクチン接種が始まればリスクオンが加速、USD/CADは1.29前半までカナダドル買いが進む可能性が考えられる。しかしワクチンの実用化と普及にはまだ時間がかかる可能性もあり、特にワクチン承認後の各国への供給体制の整備といった課題も挙げられる。カナダでは11月に入って、コロナ感染拡大がハイペースになっている。新規感染者数が4000人を上回る日が続き、23日には7000人を超えた。感染拡大を受け、トロントなど一部地域では23日から約1ヶ月ロックダウンが実施されている。経済活動が大きく制限されている中で、カナダ10-12月の経済回復は、7-9月に見られた急回復と比較して、低水準に留まると予想される。カナダ中央銀行のGravelle副総裁はスピーチの中で、家計の借金を注視していくと述べ、また景気後退に陥れば金融システムは一気に緊張するとも指摘している。外出や消費活動が制限され、雇用情勢も未だ不透明な中、カナダの経済指標にも鈍化が見られれば、USD/CADは1.33台までカナダドル安が進む可能性も予測される。WTIIは短期的なリスクオン、リスクオフの繰り返しの中で、1バレルU\$35-U\$50での推移を予想。OPECは2021年の原油需要見通しを下方修正しており、またIEAは2021年中にコロナが収束しても、原油需要がコロナ以前の水準を回復するのは2023年になるとも予想している。長期的には、ワクチンの実用化とともに経済活動が活発化、原油需要の増加がより確実なものになれば、USD/CADが1.28を下回るカナダドル買いが進む可能性が考えられるが、短期的にはUSD/CAD1.29-1.34での推移を見込む。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地の年末年始の過ごし方』
カナダの年末年始はカウントダウンイベントに参加したり、家族や友人とゆっくり過ごす人が多いと思います。というのも年末年始には大晦日や三が日のようなまとまった休みはなく、基本的に1月1日だけがお休みのためです。12月31日は休暇を取る人や、終業時間を繰り上げる会社もあり、早めに退社できる人も多いですが、1月2日からは通常通り仕事が始まります。そのため年末年始は31日から1日にかけて新年を祝い、1月1日は普通の休日として過ごしている人が多いように思います。トロントでは通常は花火の打ち上げなどのカウントダウンイベントが行われます。トロントの観光名所であるCNタワーやリブリー水族館、ロイヤルオンタリオ博物館などでもDJを招いたイベントなどが行われているようです。各地のクラブ、バー、レストランでもニューイヤーパーティやイベントが行われています。家で過ごす場合には、テレビでニューヨークのタイムズスクエアでの年越しイベントやライブを見ながらカウントダウンをしている人もよく見られます。カナダではクリスマスの時期に連休があるので、その期間が日本のお正月に近い雰囲気です。またカナダでは忘年会や新年会は一般的ではないですが、12月に会社主催でクリスマスパーティーを行うところも多いです。2020年から2021年にかけての年末年始は、新型コロナウイルスの影響で例年のような過ごし方はできませんが、ビデオコールやバーチャルイベントなどを利用して家族や友人と時間を共有する人も多くなるかもしれません。

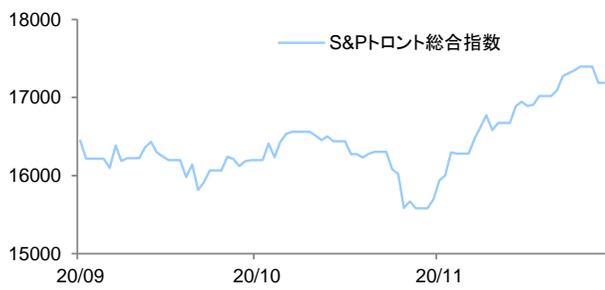
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	Markit製造業PMI	10月	-	55.5	56.0
11/4	貿易収支	9月	-2.35bn	-3.25bn	-3.21bn
11/6	ネット雇用者数変化	10月	75k	83.6k	378.2k
11/6	失業率	10月	9.0%	8.9%	9.0%
11/16	製造業売上高(前月比)	9月	1.5%	1.5%	-1.4%
11/17	卸売売上高(前月比)	9月	0.4%	0.9%	0.2%
11/18	CPI(前年比)	10月	0.4%	0.7%	0.5%
11/20	小売売上高(前月比)	9月	0.2%	1.1%	0.5%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1080	~	1120	(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	9.009	~	9.524	
	JPY/KRW	10.500	~	11.100	

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

11月のドル/ウォン相場は下落した。中秋で韓国が連休となる中、米大統領選を前にしたポジションクローズを受けてリスクセンチメントがやや悪化する中、ドル/ウォンは2日に1137.0ウォンでオープン。4日の大統領選では、市場予想以上にトランプ大統領が善戦しているとの報道に、ドル/ウォンは月高値1148.0まで急上昇した。しかし、郵便投票の結果が明らかになるにつれ、激戦州でトランプ大統領のリードが無くなってくると、米中摩擦が緩和されるとの思惑から人民元高が進行し、ウォンも連れ高に。外国人によるKOSPI買いフローも相応に入り、ドル/ウォンは下落した。9日にはバイデン氏による勝利宣言に加え10月米非農業部門雇用者増加数(予想:58万人、結果:63.8万人)および失業率(予想:7.6%、結果:6.9%)がいずれも良好だったこと等ありリスクセンチメントが大きく改善した他、ウォンの先高感を懸念した輸出企業によるドル売りフローが断続的に入ったこともあり、11日にかけて1109.2ウォンまで下落し、13日にかけて1110台で推移した。16日には当局が「最近の為替相場変動が過度であり、人為的なウォン高誘導に対し積極的に対応する」と発表した後、介入と思われる動きも入り、1110ウォンまで急反発。18日にはドル/人民元が下落する等ドル安が強まると、ドル/ウォンは1103.8まで下落したものの、大台の1100を前に実需のドル買いフローが断続的に入ったほか、当局による介入への懸念もあり、下値を切り下げる展開とはならなかった。19日には下値が固いとみた投機筋によるドル/ウォンのショートポジションの巻き戻しが入り、1116.3まで反発するも、それ以上の上昇は見られず。その後、23日海外時間に、バイデン氏がイエレン前FRB議長を財務長官に指名するとの報道もあり再びドル売り地合いとなると、ドル/ウォンは下落。26日にはBOK総裁が急激なウォン高に対し注視しているとの発言をするも、相場への影響は限定的となった。結局月末まで1100の攻防戦となり、1103.0まで下落し、結局1106.5でクローズ。

■ 今月の見通し

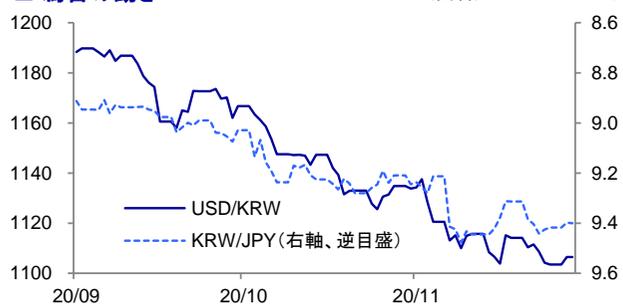
12月のドル/ウォン相場は上値の重い展開が継続することを予想する。引き続きCOVID-19からの回復が早い中国、韓国がUSD売りの対象通貨として選ばれやすく、ウォン高地合が継続しよう。また11月26日の金融通貨委員会で、BOKは2021年のGDP見通しを3.0%(従来は2.8%)に引き上げたほか、輸出の取扱量がCOVID-19の前の水準までに戻ってきているとしており、今後も実需のウォン買いフローが相応に入ることが期待されるほか、外国人投資家による株買いもウォン高材料となろう。また、韓国でもCOVID-19の感染拡大第三波がきつつあり、社会的距離のレベルの引き上げが行われているものの、外需が主導するウォン買いフローへの影響は限定的であり、感染拡大によって一時的にウォン安に振れる局面も想定されるものの、それは限定的な値動きにとどまろう。かかる状況下、大台の1100を前に水準感からくる実需のドル買いフローが相応に入り下抜けに少し時間はかかるものの、最終的には1100を割って下値を探る展開が予想されよう。ただし、足元のドル/ウォンの下落に当局より介入と思われる動きもみられており、既にCNY、KRWともに対ドルで1割以上上昇しているという状況を鑑みても、下落速度はやや緩慢なものになってくることを想定する。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の年末年始の過ごし方』
 韓国の年末年始ですが、欧米同様クリスマスと1月1日が祭日となっており、それぞれ家族や恋人と過ごすことが習わしとなっております(韓国ではほかの東アジアの国と同様に旧正月の時期が連休となっており、その際に遠方の実家に帰って親せきや家族と過ごします)。よって年末年始は日本のお正月と違いほとんどのお店が通常通り営業しており、日本のお正月のような盛り上がりはありませんが、それでもソウルのいたるところではイルミネーションが飾られます(ただし韓国では1月1日よりクリスマスを重要視するため、クリスマス前から飾られたMERRY CHRISTMASのイルミネーションやクリスマスツリーが1月1日になってもそのまま飾られているところが散見されます)。また、日本同様に初日の出イベントがあり、各地の公園や山頂で初日の出を見る人でにぎわいます。そんな韓国のお正月ですが、この時期のソウルは気温が低く外に出るのは正直しんどいです(特に日の出前は-10℃以下になることもざらです)。東京からきた私としてはソウルのお正月のイベントに一度は参加したいなと思いつつ、過去2年はあまりの寒さに外に出ず何事もなく終わりました。2021年の1月1日はコロナの影響もありイベントは多くが中止されると思いますので2022年の1月1日こそお正月のイベントに参加したいと思います。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	輸入(前年比)	10月	-2.1%	-5.8%	1.6%
11/1	輸出(前年比)	10月	-3.5%	-3.6%	7.7%
11/1	貿易収支	10月	\$4485m	\$5981m	\$8521m
11/3	CPI(前年比)	10月	0.8%	0.1%	1.0%
11/11	失業率	10月	3.8%	4.2%	3.9%
11/24	消費者信頼感	11月	-	97.9	91.6
10/26	BOK政策金利発表	11月	0.50%	0.50%	0.50%
11/30	鉱工業生産(前年比)	10月	0.3%	-2.2%	8.1%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 28.40 ~ 28.85
TWD/JPY 3.60 ~ 3.70

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

11月のドル/台湾ドルは約9年半ぶりに28.500を割り、直近安値を更新。

ドル/台湾ドルは28.930でオープン。月初も、引き続き輸出企業のドル売りが優勢であったが、大統領選を控え、様子見ムードも強く、28.600付近で推移。11/4に米大統領選の開票が始まり、直前の世論調査と異なりトランプ氏の健闘が判明すると、アジア通貨安となり、ドル台湾ドルも28.650付近まで上昇。しかし、次第にバイデン氏勝利の見方が強まり、リスクオフの展開となると、11/6には約9年半ぶりに節目の28.5を割り、一時28.492まで下落。その後は11/9に28.500を割る瞬間もあったが、それ以降は取引時間中は28.500をわずかに上回る水準を非常に狭いレンジで推移した。月半ば以降、台湾加権指数は新型コロナウイルスのワクチン開発の報道等から最高値を更新し続け、11/24には14,000ポイントに迫る勢いであったのにも関わらず、ドル/台湾ドルは28.500を割ることはなかった。

■ 今月の見通し

12月のドル/台湾ドルは台湾ドル高を見込む。

今年の台湾ドル高が加速した場面を振り返ると、6月、9月と、四半期末の輸出企業のドル売り圧力が強まる場面であった。足許の貿易動向をみると、10月の輸出額は前年同月比+11.2%、先行指数となる輸出受注額も前年同月比+9.1%増加と、単月の最高額を更新しており、好調さは変わらずである。12月についても好調な輸出企業のドル売りが優勢となるであろう。米国大統領選については、バイデン氏ではほぼ当選確実であるが、米中対立がすぐに和らぐことは想定されておらず、台湾の輸出にはプラスの材料のままである。また、新型コロナウイルスの影響でテレワーク需要が増えたことも台湾の輸出増加の要因であったが、ワクチン開発の明るいニュースが報道されており、パンデミックの収束も見えてくる。しかし、5G等のIT、情報通信の発展は止まらず、台湾の輸出企業にとっては前向きな環境は変わらないであろう。そうすると、警戒しなければならないのは、台湾ドル高水準そのものである。現在の台湾ドル高水準は、節目の28.500を割り込んで、アジア通貨危機以来の台湾ドル高水準が見えており、産業界から台湾ドル高に対して悲鳴が上がっている。11月については28.500を割った後は、28.500をわずかに上回る水準で底堅く推移しているものの、輸出企業のドル売り圧力が強まり、一層の台湾ドル高に行った際の当局の対応には警戒しなければならない。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の年末年始の過ごし方』

当地は中華圏なので、お正月は旧正月(今年は2月でした)を指し、春節として連休となり、地元に戻ったりするため、年末年始の祝日は1/1のみです。近年は若者を中心にカウントダウンパーティーやライブに行っているようです。有名なところでは、台北のランドマーク「台北101」でカウントダウンイベントとして、ビルから花火を打ち上げます。高層ビルがまるで燃えているように大量の花火がビルの側面から打ちあがります。ただし、ビル周辺は非常に混雑するそうです。このご時世、年末年始に日本には帰れそうにないので、日本では消防法に引っかかって不可能であろう花火を見て、年越しをしようと思います。

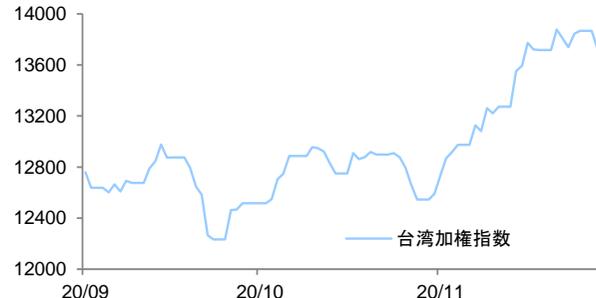
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/5	外貨準備高	10月	-	501.24B	499.60B
11/5	CPI(前年比)	10月	-0.20%	-0.24%	-0.58%
11/9	輸出(前年比)	10月	5.4%	11.2%	9.4%
11/9	輸入(前年比)	10月	-2.2%	-1.0%	-5.4%
11/9	貿易収支	10月	5.90B	7.46B	7.10B
11/20	輸出受注(前年比)	10月	9.0%	9.1%	9.9%
11/23	失業率	10月	3.80%	3.77%	3.78%
11/23	鉱工業生産(前年比)	10月	7.80%	7.06%	11.62%
11/27	GDP改定値	3Q	3.30%	3.92%	3.33%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7500 ~ 7.7600
HKD/JPY 13.20 ~ 13.60

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【11月の香港ドル直物相場】

11月の香港ドル直物相場は香港ドル高の取引バンド上限である7.75から離れて、7.7520~7.7550を中心とするレンジ推移となった。香港ドル相場において、株式市場におけるIPO関連の資金フローは引き続き重要なポイントとなっている。

香港ドル相場は過去最大規模となる350億米ドルものIPOに向けた資金流入により、取引バンド上限の7.75レベルを再度試す動きとなった。しかしながら当該中国フィンテック企業のIPO案件は11月3日上場直前になって規制環境の変更を理由に突如延期された。

IPOの延期は香港市場への資金流入の抑制に繋がり、香港ドルは7.7574まで軟化した。大統領選挙中は市場のボラティリティに連動して変動していたが、ワクチン開発の進展を受けての反応は見られなかった。新型コロナウイルスの再拡大によって香港の第4四半期の経済成長見通しは鈍化した。香港ドル相場への影響は限定的だった。潤沢な香港ドルの流動性を受け、香港ドルフォワードレートはカーブ全般にマイナス圏に沈んだ。

【11月の香港ドル金利市場】

香港金融管理局(HKMA)はIPOによる資金流入に対して過去数ヶ月に渡って続いていた香港ドル流動性供給を抑制した。HKMAのアグリゲートバランスは過去最高の4,575億香港ドルに達しており、香港ドル金利は軟調に推移した。1か月物と3か月物の香港ドルHIBORはそれぞれ約10年来の最低水準まで低下した。米金利と比較すると、1か月物の香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差は昨年11月以来のマイナスに転じ、3か月物の金利差は10bp程度まで縮まっている。香港市場へのIPOフローの鈍化によってHKMAの香港ドル売り介入は今年5月以来始めて実施されなかった。

■ 今月の見通し

【12月の香港ドル直物相場】

12月の香港ドル直物相場は7.75から7.76のレンジ推移を想定する。巨額IPOの延期によるセンチメントの悪化から香港ドルは弱含むだろう。海外の投資家からの香港市場における中国企業のIPOに対する投資意欲は中国政府の規制強化懸念によって後退している。米国からの制裁リスクも燃り続けている。香港自治法に基づき、米国財務省は制裁対象の中国・香港当局者と取引関係がある金融機関に対する制裁リストを公表する予定である。制裁対象となった金融機関は米ドルの調達に困難になり、香港市場での米ドルの調達コストが上昇する恐れがある。米国では新型コロナウイルスの感染拡大が続いていることから、FRBは12月の会合において資産買入プログラムに調整を加え、米金利を低位で据え置こう。香港ドルと米ドルの金利差が縮小している環境では新たなキャリートレードは限定的になると考える。

【12月の香港ドル金利市場】

12月の香港ドル金利は香港ドルの流動性が潤沢であることから引き続き低位で推移するだろう。HKMAは市場での為替基金証券(EFBN)に対する強い需要にもかかわらず、感染者数の再拡大で香港経済の下振れリスクが高まる中、香港ドルの流動性を吸収するEFBNの発行を控えた。香港市場におけるIPO需要の鈍化は株式購入に関わる香港ドル資金需要の低下を示唆する。年末にかけての香港ドル資金調達需要は、香港ドル金利のボラティリティを一時的に高める可能性があるが、その影響は限定的なものに留まるだろう。

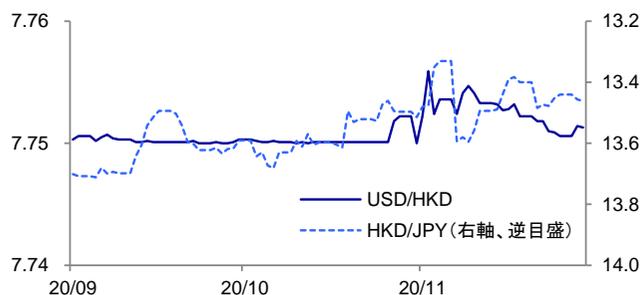
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の年末年始の過ごし方』

香港の多くの人々は年末年始の休日を利用して国外旅行を楽しんでいましたが、現在の環境化ではそれは困難になりました。クリスマスについては、クリスマス仕様のビュッフェがオススメです。しかしながら、多くのレストランはすぐに予約で一杯になるので、少なくとも1か月前には予約を済ませる必要があります。友人や家族と自宅でクリスマスパーティーを開くことも一計です。クリスマスギフトの交換は楽しみの一つですが、おそらく好みのギフトを手に入れることはできないでしょう。弊行のオフィスがある尖東エリアを散歩すれば、多くのビルがクリスマスイルミネーションでライトアップされているのを楽しめます。大晦日には、多くの人がランカイフロンやコースズウェイベイといった繁華街でのカウントダウンイベントを楽しみます。また、ビクトリアハーバーでカウントダウンに合わせて打ちあがる花火は一見の価値があります。

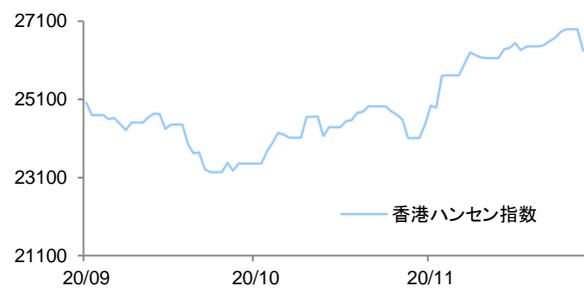
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	小売売上高(価額、前年比)	9月	-12.30%	-12.90%	-13.10%
11/4	日経香港PMI	10月	-	49.8	47.7
11/6	外貨準備高	10月	-	\$475.0b	\$453.4b
11/13	GDP(前年比)	3Q F	-3.40%	-3.50%	-3.40%
11/13	GDP(季調済/前期比)	3Q F	3.0%	2.8%	3.0%
11/17	失業率(季調済)	10月	6.6%	6.4%	6.4%
11/24	輸出(前年比)	10月	9.0%	-1.1%	9.1%
11/24	輸入(前年比)	10月	3.6%	0.6%	3.4%
11/30	貿易収支(HKD)	10月	-12.5b	-36.8b	-12.7b
11/30	財政収支(香港ドル)	10月	-	-32.7b	-47.2b

中国人民元相場

予想レンジ:

USD/CNY	6.5000	～	6.8500
CNY/JPY	14.60	～	16.06
100JPY/CNY	6.2300	～	6.8500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 藤山 俊文

■ 先月の為替相場

11月のUSD/CNYは大きく元高進行し一時6.54台へ。

月初、米大統領選を控え6.69近辺でUSD/CNYはスタートした。

3日、大統領選開票の当日は混戦の様相に方向感が定まらなかったが、次第に民主党のバイデン氏優勢との報道から、ドル安元高サイドへの動きが大きく強まる。市場は「バイデン氏勝利+共和党が上院過半数獲得」という議会の「ねじれ」を織り込み、大規模な財政出動可能性の低下見通しから、米金利低下、ドル安の様相とリスクオンの流れとなった。人民元も元高の動きとなり、6.60近辺まで低下した。

9日、大手製薬会社の「コロナワクチンの治験で9割を超える有効性を確認」との発表に市場はリスクオンに転じ、米株高からドル高で反応。12日にはランプ大統領が、中国軍管理下にあると判断された中国企業に対する株式売買禁止の大統領令に署名したことで、関連中国銘柄株が下落すると元安で反応する場面もあったが値幅は限定的。

16日には6.6を割り込む水準まで下落。18日、欧米での感染拡大抑制に向けた動きが意識され米金利は低下、ドルも低下し、一時6.54台までドル安人民元高が進行。

24日夜間にNY時間の朝方発表された経済指標が良好だったことで、ドルが上昇し一時6.59台まで急伸した。その後、米ダウが取引時間中に30000ドルの大台を突破した動きにドル売りが強まりドル人民元は下落。新型コロナワクチン開発期待や、バイデン次期米政権の主要ポストが発表されるなど政権移行手続きが進むとの見通しから、リスク選好のドル売りが継続しており、月末にかけては6.57台後半で推移している。

■ 今月の見通し

12月のUSD/CNYは上値重い推移を予想する。

新型コロナウイルスの世界の感染者数が6,000万人を超えるなど、感染拡大がみられており経済活動の停滞が予想される中しばらくはリスク回避的な動きに警戒が必要であると考えます。

米大統領選では民主党のバイデン前副大統領が勝利を確実にし、財務長官にイエレン前FRB議長を起用する方針など主要なポストが発表され政権移行手続きが進む見通しである。また、順調なワクチン開発などの材料もあり今後リスクオン相場となる材料はあるものの、米金利に大幅な上昇は現状見られていない。12月のFOMCでは米国債の購入増など量的緩和拡充が検討されるとの報道も出ている。米金利が相応に上昇する可能性は低いものと考えており、中長期的にはドル高圧力は低いものと想定する。

11月上旬には当局による出口戦略への言及も見られており、中国人民銀行から発表された第3四半期の金融政策執行報告では、中国では通常の金融政策を可能な限り長く継続すると発表。また、直近では国有企業による社債のデフォルトが相次ぐなど中でも当局による支援策は縮小しており、公的支援で社債の債務不履行をなくすとは考え難い状況。人民元高方向のセンチメントを与える要因になると考える。

現状では、人民元高のトレンドを変えるほどの材料はなく、引き続きドル人民元の上値は重く推移するものと予想する。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の年末年始の過ごし方』

中国では春節(旧暦の正月)に新年を迎えます。今回は春節の過ごし方をご紹介します。正式な日程は12月に国务院から発表されますが、2021年は春節が2月12日(金)、休みは2月11日(木)～17日(水)の7日間と予想されています。

「小年」(旧暦の12月23日か24日)
大掃除をしたり春節の飾りものを飾ったりと年越しに向けて準備を始めます。金、赤色などきらびやかな飾り物を家の門や壁に貼ったりします。

「除夕」(旧暦の12月31日)
中国(北方)での年越しの代表的な食べ物水餃子です。餃子を食べることで金運にめぐまれるのだとか。盛大に爆竹を鳴らして楽しむ習慣がありますが近年、都市部などでは禁止されています。

「大年初一」(旧暦の1月1日～4日)
日本の元旦と同じで親戚に挨拶回りをしたりします。お年玉は中国でもあり「压岁錢」というのだそうです。

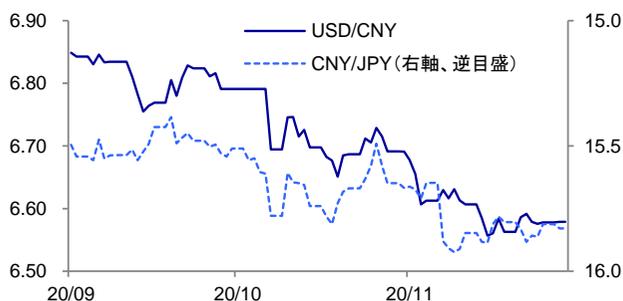
「正月初五」(旧暦の1月5日)
財神というお金の神様がやってくる大切な日。

「元宵説」(旧暦の1月15日)
この日をもって中国の正月は終わりとなります。

ちなみに1月1日は中国でも祝日ですが、過ごし方は普通の祝日と変わらないようです。

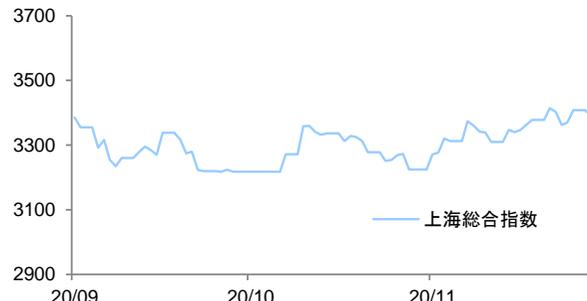
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	財新・製造業PMI	10月	52.8	53.6	53.0
11/2	財新・サービス業PMI	10月	55.0	56.8	54.8
11/7	貿易収支	10月	\$46.30b	\$58.44b	\$37.00b
11/10	PPI(前年比)	10月	-1.9%	-2.1%	-2.1%
11/10	CPI(前年比)	10月	0.8%	0.5%	1.7%
11/16	鉱工業生産(前年比)	10月	6.7%	6.9%	6.9%
11/16	小売売上高(前年比)	10月	5.0%	4.3%	3.3%
11/16	都市固定資産投資(年初来/前年比)	10月	1.6%	1.8%	0.8%
11/20	LPR1年物	-	3.85%	3.85%	3.85%
11/20	LPR5年物	-	4.65%	4.65%	4.65%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3000 ~ 1.3700
SGD/JPY 76.00 ~ 78.50

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2020年11月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD高が進行。

月初のSGDはやや軟調に推移。4日、米大統領選挙の開票速報につき接戦州のフロリダなどでトランプ氏の優勢との報道がアジア時間中に伝わったことを受けてUSD買いが強まり、SGDは弱含む展開。USD/SGDは一時、1.37台前半の水準までSGD安が進行。

しかしその後は一転してSGD高の流れに。米大統領選挙の動向につきバイデン氏優勢の報道が流れたことや、10月の米雇用統計が強い結果を示したことなどからリスクオン相場となり、9日には米製薬大手による新型コロナウイルスのワクチン開発につき大きな進展が発表されたことが伝わる中、新興国通貨は上昇。USD/SGDについても、1.34台前半の水準までSGD高が進行。

その後月中にかけて、欧米での新型コロナ感染者増加が懸念されたことから、新興国通貨の上値が重くなる場面もあったが、米製薬大手に続き米バイオ製薬企業より開発中の新型コロナウイルスワクチンにつき高い有効性を示すととの報道が伝わったことにより、SGDは再び上昇。19日にかけて、USD/SGDは1.34ちょうどの水準までSGD高が進行した。

その後も月末にかけてUSD安の流れが継続し、新興国通貨は全般的に底堅い推移となった。24日、トランプ米大統領が次期政権への移行プロセス開始を承認したとの報道や、米国の主要株価指数が史上最高値を更新するといった局面において、リスクオンの動きがさらに強まる中、USD/SGDは1.34を割りこみ、1.33台後半の水準まで下落。30日発表の中国製造業PMIが予想対比強い結果を示す中、引続きSGDは堅調推移となり、USD/SGDは1.33台後半の水準を維持し推移している。

■ 今月の見通し

2020年12月のSGD相場は、SGD高の進行を予想。

11月のSGDは月を通じ大幅に上昇。月初1.37台であったUSD/SGDは、11月30日のアジア時間現在、1.33台後半の水準で推移している。

このUSD/SGDの水準は2018年6月以来のSGD高水準に達しているが、年末に向けてさらにSGD高が進行する展開を予想する。

USD/SGDの下落(SGD高の進行)については、近時の全世界的な株高やワクチン開発期待を受けたリスクオン相場による新興国通貨の上昇という要因以外にも、SGDの調達コストの低下(SGDフォワードカーブのフラット化)も要因として挙げられると考えている。現在、3か月までの期間においてUSD/SGDのフォワードポイントはほぼゼロの水準まで縮小しており、SGDロング保有時のコストがほぼ掛からない状況となっている。米金融当局の今後の動向については、FRBは12月にでもQE拡大を発表するのでは、との予想が強くなっている。シンガポール側のMASについても当面、現在の緩和スタンスを維持することが見込まれており、同低コスト環境は暫くの間は継続されよう。

シンガポール内の各種経済指標は強弱まちまちの結果を示しているものの、シンガポール株価は新興国INDEXのなかでも特に上昇しており、各種変動要因が大きくダウンサイドに振れるようなネガティブサプライズさえなかりせば、SGDは年末にかけて堅調推移となる。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の年末年始の過ごし方』

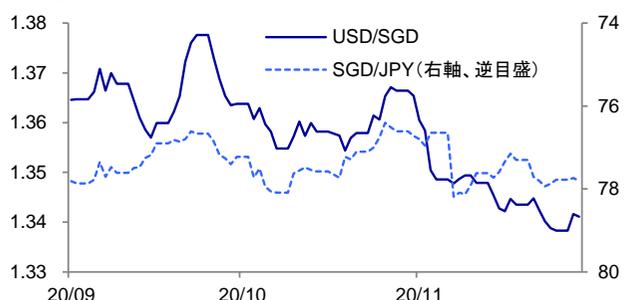
シンガポールにおける年末年始の過ごし方ですが、特段、目立ったものはありません。当地の方々はこちらかと言えば旧正月やイスラム正月を重視し祝われる傾向にあり、当地のお休みは1月1日のみ。12月31日は通常通りの営業日でございますので、年の瀬まで確りと働かせて頂く所存でございます。年末に絞らず12月内まで拡げてみますと、当地はとてクリスマスを重ねる傾向がございますので、本稿執筆中の11月末はクリスマスに向けた数多くの商戦が繰り広げられており、街はとて賑わっております。しかし、クリスマスを過ぎると年内は閑散、といった感じです。

強いて申し上げますならば、年末は花火を見ることが楽しみです。昨年までであれば12月31日に花火が上がっていましたが、昨今の環境下、今年も同イベントが行われるのかどうかは不透明。先週、週末に街中を走って参りましたら、おそらくリハーサルと思われる特殊なライトアップがベイサンズあたりで行われておりましたので、年末のショーイベントがゼロということは無さそうです。

現在、シンガポールは新型コロナ対策 Phase2の状態にあります。年内にPhase3に移行するとの発表もあり、仮にPhase3になれば上限を8名までとしてディナーを行うことも可能です。もしそれが叶えば、日本に帰れず当地で年末を過ごすこととなった知人達とともに、ささやかな夕食会でも行いたいと考えている次第です(アジア・オセアニア資金部:成田)。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/3	購買部景気指数	10月	50.5	50.5	50.3
11/5	小売売上高(前年比)	9月	-3.9%	-10.8%	-5.4%
11/17	非石油地場輸出(前年比)	10月	5.1%	-3.1%	5.8%
11/23	CPI(前年比)	10月	0.0%	-0.2%	0.0%
11/23	GDP	3Q	-5.5%	-5.8%	-7.0%
11/26	鉱工業生産(前年比)	10月	7.3%	-0.9%	25.6%

タイバート相場

予想レンジ: USD/THB 29.50 ~ 32.00
THB/JPY 3.30 ~ 3.50

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 山崎 浩幸

■ 先月の為替相場

11月2日のドルバートは31.17近辺でオープン後小動きで推移。デモの緊張が和らいだことでバート買いが継続し、3日にかけて31.05レベルと3週間ぶりに31.10割れに突入。4日は朝方米大統領選挙でトランプ大統領が優勢と伝わると市場はドル買いで反応し31.15レベルまで上昇。5日、タイ10月のCPIが前年比+0.50%と発表されるも反応は限定的。米国でいわゆる「ブルーウェーブ」へのシナリオが後退したことを背景に米金利が低下すると31.00を割込み30.80付近まで下落。6日にはバイデン氏勝利の予想が強まるも、対ドルでアジア通貨は堅調に推移し30台半ばまで下げ幅を拡大。週明け9日は、週末に米大統領選挙でバイデン氏勝利が確定的となるとアジア通貨高がさらに進み一時30.40を割込んだ。ところが、米製薬企業のコロナワクチン開発でポジティブな報道が見られると、一転して急速なドル買いで反応し、米金利が急騰すると一時30.70近辺まで上昇。しかし、その流れは続かず2010年以來となる海外投資家によるタイ株式市場への資金流入が観測される等のバート買い圧力から30.30付近まで下落。以降週末にかけては、じりじりとバート高が進行するも、各地でのCOVID-19感染拡大の報道や再ロックダウンの検討により底堅い推移が続き30.10台後半での値動きが続いた。週明け16日は、国家経済社会開発委員会(NESDC)が7~9月期のGDPを発表し、前年同期比6.4%減の結果。通年見通しは7.5%減から6.0%減へ上方修正されるも、相場への反応は限定的であった。17日はタイ工業連盟が発表した10月自動車生産台数では国内市場向けが前年同月比約19%増との結果となるも、翌日にタイ中銀の金融政策委員会(MPC)を控えてもみ合い。MPCでは事前予想通り政策金利が0.50%に据え置かれた。タイ政府は緊急事態宣言を1月まで延長することを発表した他、コロナ隔離の短縮議論を年明けまで棚上げしたこと、外国人観光客の受入に対する期待が後退すると30.35近辺まで上昇。19日になると、翌日のタイ中銀によるバート高対策の会合が警戒されてバート売りとなり、一時30.40台を突破。20日はタイ中銀がバート高対策として外貨預金や外国証券投資の規制緩和を発表するも、効果は限定的との見方から反応薄となり、30.30近辺で越週。週明け23日は30.25近辺でオープン。タイ商務省が10月の貿易統計を発表し、輸出は前年比6.7%減少と6か月連続でのマイナスとなったが、相場への反応は限定的。その後、月末にかけては米経済回復への期待からのドル高圧力や引き続きタイ国内における反政府デモ等を材料に、30.20台半ばへ向けてじりじりと下落する展開が続いた。

■ 今月の見通し

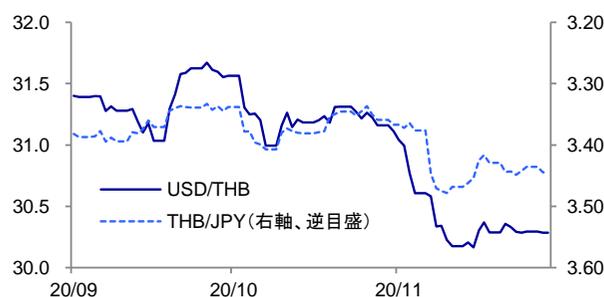
ドルバートは、引続きバート高圧力が継続するものの、国内の政情不安、海外のCOVID-19の感染拡大等を受けて、底堅く推移する展開を予想。COVID-19のワクチン開発の進展を受けて、久方ぶりに31をブレイクすると即座に30を割込みうかというレベルまで急落した。6月に31を割込んで以来31-32のレンジ推移が継続してきただけに、動きづいたのちの動きは急であった。一方で、ワクチン開発の期待をテコに大きく相場は動いたものの、実際にその効果が発揮されるまでには時間を要する一方、本当に実用化されるかどうかについても未だ確実とはいえない状況に、報道だけが先行し、期待感だけでここまでバートが買い込まれたものと考えている。これ以上のバート高にはリアルなデータが必要であるものと予想しており、むしろ足許のリアルな状況はそこまでの楽観を許さない状況を示しており、足許の厳しさと将来の明るさの狭間で底堅い展開が今なお続くものと予想。足許といえば、国内に目をやると政情不安もここへ来て、再燃しそうな状況となってきており、こちらにも目が離せない。反政府デモは9月頃から大きな動きとなり、公共交通機関に影響を与えたりとこちらも実態的な影響が出始めているがそれ以降は秩序だてで行われており、政府も歩み寄りをみせたりと平和的な歩みを見せ初めたものの、その結果が出ない間に再びデモが激しくなりつつあるようで、政府側も対応を強化しているようにも見受けられる。引き続き反政府デモの動きにも注意したい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の年末年始の過ごし方』
タイにおいて、12月31日と1月1日が休暇であるものの、この2日のみが休暇となるが、他はいたって普通です。単純な2連休があるといった風で、新年を迎えるという感じはあまりしません。その点、日本でいう正月休みのようなものはタイにおいては4月のソンクランがそれにあたるようで、みなさんが帰省されたりすることが多いようです。とはいっても、新年を迎えるにあたり各地ではカウントダウンイベントが行われます。今年はCOVID-19の影響でどのようになるかは分かりませんが、例年は観光地であるタイのリゾート地においても、世界各地からリゾート地で年を越そうとする観光客が多く集まり、新年を祝うイベントが行われています。やはりそういった地域ではガラディナーというイベント兼ディナーのイベントが夕方から年明けまで用意されており、ひたすら飲み明かすといったイベントが用意されています。新年の0時ちょうどには、花火があがり新年をお祝いします。バンコックにおいては、各地で花火があがりますが、特にバンコック西部を流れるチャオプラヤ川の流域にある高級ホテルの集まる地域においては、非常に多くの花火が集中して打ち上げられ、ホテルから見るその様子は正に壮観です。

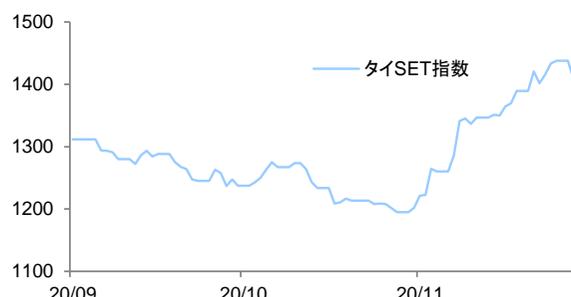
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/5	CPI(前年比)	10月	-0.50%	-0.50%	-0.70%
11/5	CPI Core(前年比)	10月	0.22%	0.19%	0.25%
11/12	消費者信頼感指数	10月	--	50.9	50.2
11/16	GDP	3Q	-8.80%	-6.40%	-12.20%
11/18	タイ中銀政策決定委員会	11月	0.50%	0.50%	0.50%
11/23	貿易収支(通関ベース)	10月	\$2000M	\$2047M	\$2230M
11/23	輸出(通関ベース/前年比)	10月	-5.00%	-6.71%	-3.86%
11/23	輸出(通関ベース/前年比)	10月	-13.00%	-14.32%	-9.08%

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.0400 ~ 4.1300
 MYR/JPY 25.2500 ~ 25.9000
 JPY/MYR 3.8600 ~ 3.9600

マレーシアみずほ銀行 関上 伸一

■ 先月の為替相場

11月のUSD/MYRは、米大統領選での民主党勝利を受けたUSD安、対中を柱とするマレーシア輸出の回復、原油価格の反発から、4.17台から4.06台迄下落する展開となった。

月初USD/MYRは4.16レベルでオープン。3日に金融政策決定会合でマレーシア中銀はQ3の急速な経済回復に触れ、政策金利(OPR)を1.75%に据置。然し過去数か月の感染拡大にも言及し、Q4のGDP成長率の減速を織込み、8月発表の20年予測(▲5.5~3.5%/y)を据え置いた。同夜の米大統領選の投票開票序盤で共和党現職が予想以上に優勢と流れると「赤い蜃気楼」が立ち上り、USD/MYRも4.17台に上昇するが、結局此処が月間高値。郵便開票と共に遅れて押し寄せた「青い波」に吞まれて、マレーシア21年度政府予算案発表日の6日には4.12レベルに反落。米製薬大手のコロナワクチンが90%を超える有効性を示したとの治験報道に、9日に4.10台迄続落した。

中旬は13日のQ3GDP発表前迄に利合いの買い戻しでUSD/MYRは4.13台迄反発も、結果は▲2.7%と予想比良好で直ちに4.12台に軟化。追ってモデルナ社の試薬が94.5%の割合で感染防止効果があったとの治験結果が公開され、且つ撰氏▲70度を要する米製薬大手のワクチンと異なり冷凍庫レベルの温度で保存可能との情報が流通期待を高めると、17日に再度4.10迄下落。翌18日も輸出フローや原油上昇、軟調なUSDインデックスを受け、2月以来の安値を4.08迄更新。その後欧米感染者数上昇から4.10レベルに反発も一時的で、「米共和会上院が追加コロナ経済対策の協議を再開」との報道に米株が反発する中、20日に4.09レベルに再度下落した。

下旬は、注目された予算案が26日に稀にみる強行採決によって通過。総選挙リスク回避から株価上昇と共にUSD/MYRも4.06台に下落。年間安値目前で12月に渡る。

■ 今月の見通し

12月のUSD/MYRは4.03~4.13レンジでの推移を予想。大統領選後に鮮明化したUSD安基調とワクチン期待感に加え、マレーシア輸出の順調な回復や21年度政府予算案発表後に目先の格下げリスクが後退したことがMYRの支援材料。一方で国内のコロナ第3波の収束は未だ見えず、政局の不透明感も残ることから、一本調子のMYR高は望みにくい。

米大統領選の最終決着は14日選挙人投票に持ち越される見だが、現職再逆転の公算は小さく、米国は積極財政と超低金利、高水準の流動性供給継続とのUSD安シナリオが定着しつつある。

翻ってマレーシアでは、連立与党内からも首相の不信任動議が提出される異常な環境で、21年度政府予算案が11/6に上程。中期的施策としてマハティール政権時の中期ビジョン「シェアード・プロスペリティ・ビジョン2030」を踏襲するも、足元のコロナ対策に主眼が置かれた。今年度の財政赤字対GDP比率着地見込▲6.0%、21年度計画▲5.4%と、19年度迄▲3%台前半で推移していた事と比して「戦時財政」の様相だが、ソブリン格付見通しを既に「Negative」に引き下げているS&PやFitchを含め、格付大手3社から目先の格下げを示唆するコメントは出ていないことが一旦の安心感を与えている。

26日の予算案決議は前代未聞の口頭採決となり、議長が賛成多数と判断。新型コロナ第三波も依然落ち着きを見せない状況で解散総選挙は困難な中、ムヒディン政権は辛くもこのリスクを回避。しかし予算案詳細配分は議院内委員会に委ねられ、17日迄持ち越されたことから、混迷が続く場合はMYRの悪材料となる。

然しながら需給面では、中国向け輸出の大きな伸長が堅調な人民元とMYRの相関性を一層高め、また海外投資家の資本フローも流入基調にあることから、MYRが緩やかにサポートされる展開を予想する。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地の年末年始の過ごし方』

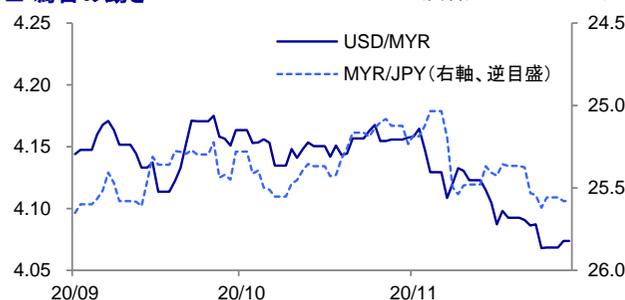
当地ではマレー系ムスリム・中華系・インド系のそれぞれに別途「お正月休み」が存在し、また常夏の気温も手伝ってか、日本的な年末年始というムードはなかなか感じられないのが実態だ。然しながら、大晦日にはクアラルンプール・シティセンター(KLCC)の中心に位置するKLCC公園で新年のカウントダウンが行われ、午前0時きっかりに打ち上げ花火大会となる。

当地では祝日が元日1日のみという暦で、大晦日が月末・年末のお取引のピークと重なることから、残業の後にオフィスの窓から華々しく打ちあがる花火を眺めて一年の締め括りとする人も少なくない。ただ今年は新型コロナの感染拡大が続いている環境下、12/6迄条件付活動制限令が施行されており、年末跨ぎの延長の可能性もあることから、現時点では花火大会は見通せない状況だ。

元日と言えば日本では初詣だが、実は当地にも出雲大社の講社が、クアラルンプールからほど近いセランゴール州のシャーアラムにある。さすがに活動制限令の環境下で祭典などは控えているようだが、参拝は今も継続許可されている。新年こそは良い年となるように、皆様のご健康とご多幸を是非祈念したい。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/3	Policy Rate(OPR)	3-Nov	1.75%	1.75%	1.75%
11/6	Foreign Reserves	30-Oct	-	104.6B	105.2B
11/9	Industrial Output y/y	Sep	2.3%	1.0%	30.0%
11/13	GDP y/y	Q3	-4.0%	-2.7%	-17.1%
11/13	C/A Balance MYR	Q3	24.0B	26.1B	7.6B
11/20	Foreign Reserves	13-Nov	-	104.9B	104.6B
11/25	CPI y/y	Oct	-1.4%	-1.5%	-1.4%
11/27	Trade Balance (MYR)	Oct	20.4B	22.1B	22.0B
11/27	Exports	Oct	-0.4%	0.2%	13.6%
11/27	Imports	Oct	-4.9%	-2.5%	-3.6%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13800 ~ 14400
 IDR/JPY 0.71 ~ 0.75
 JPY/IDR 133.33 ~ 140.85

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

11月のドルルピアは、ルピア高が進んだ後、ルピアは底堅さを維持した。ドルルピアは月初2日、14700水準で米大統領選を前に様子見ムード。発表されたインドネシアの10月インフレ率は前年同月比で+1.44%と、中銀目標の2~4%に比べ低水準が続いた。翌3日は米大統領選が海外時間に控える中、徐々にリスク選好姿勢が強まり、ジャカルタ株価指数が上昇し、ルピア高に。勝敗が中々決まらない米大統領選となったが、徐々にバイデン氏が優勢であることが明らかになるに連れ、不透明感が払拭されていく中、投資家のリスクセンチメントは改善を続け、ルピアは堅調に推移。5日にはインドネシア第3・四半期国内総生産(GDP)が発表され新型コロナウイルス感染拡大が消費や企業活動を圧迫し、前年同期比3.49%減少し、2四半期連続で縮小したことで経済は約20年ぶりに景気後退(リセッション)入りとなったが、ルピアは堅調を維持。週末の6日にはジャカルタ株価指数が上昇に連れ、ルピアは14200水準まで急伸した。9日には米製薬大手とドイツのバイオ企業のCOVID-19ワクチンの臨床試験で90%以上の有効性が示されたと発表されたこと、翌10日にはロシアが、同国のワクチンの治験で有効性が92%だったと発表されたことで、投資家のリスク選好姿勢は更に強まり、ルピアは一時14000近辺まで上昇し月内の高値水準を記録した。ルピアの上昇が急だったこともあり、その後は一旦反落し、13日週末にかけて14200台まで押し戻された。

月後半、再びワクチン開発進展に関する報道から17日には14000台までルピアは強含んだ。19日には注目のインドネシア中銀政策決定会合では市場参加者の見方が分かれるも、現状維持の予想が強い中、政策金利である7日物リバースレポレートは0.25%引き下げられ3.75%となった。これを受けて、翌20日にかけて再び14200台までルピア安となった。また、同日中銀により発表された20年第3四半期の国際収支統計によると、経常収支は対GDP(国内総生産)比0.36%の9億6400万ドルの黒字となり、2011年以降の黒字を計上した。その後は月末に向けて、ルピアは底堅く推移。月末に向けたドル買い需要を海外投資家からの資金流入で吸収し、ルピアはじりじりと上昇し14100水準での取引となっている。(27日時点)

■ 今月の見通し

12月のドルルピアは、ルピアが底堅く推移することを予想する。コロナウィルスの感染状況だが、インドネシアにおけるコロナウィルス感染拡大状況も厳しいものの、欧米中心に、事態は更に深刻さを増している。しかし、ワクチン開発の進展に関する報道からは、12月には米国でワクチン接種が開始される見込みである等、ワクチンの普及が近づいていることがより確かなものとなっていることで、期待が増している。結果的に、足元の感染状況は厳しさを増しているものの、金融市場にとっては、緩和的な各国中銀の政策も相まって、投資家のリスク選好を後押しする格好となっている。外国人投資家によるインドネシアへの資金流入が続く可能性は高く、ルピアのサポート材料となるだろう。

インドネシアのコロナ感染状況は上述の通り厳しく、輸入額の激減という結果をもたらしている。それによって、ポジティブとは言い難いものの、大幅な貿易黒字の計上が続いている。10月貿易黒字額は36億ドルを超えた。貿易黒字の大幅な改善により、ついに20年第3四半期の経常収支は2011年以来となる経常黒字転を果たすこととなった。慢性的な経常赤字がルピアの弱さの根本的要因であったことを踏まえれば、景色は変わっており、足元のルピアの底堅さに影響していると考えられる。長期的には経済が回復するに従い、再び経常赤字に悩まされることになると思われるが、短期的には経常黒字はルピアをサポートする材料となろう。

ルピアのしっかりとした推移が続けば、追加利下げの可能性も燦るが、上述の理由から、先月の利下げ時同様、ルピアは底堅さを維持出来るのではないかと。

但し、リスクとしては、中銀による国債の直接買入や、独立性への懸念が燦っていることには変化がないことが挙げられる。これらの懸念に再び焦点があたり、堅調だったルピア相場の巻き戻しへは留意すべきだろう。このテーマに関するヘッドラインには警戒を続けたい。

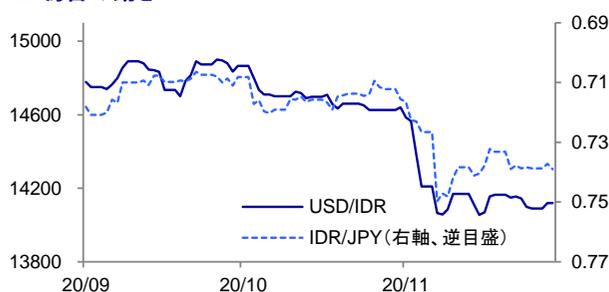
以上より、今月のドルルピアは、ルピアの底堅い推移を予想したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

大変恐縮なのですが、諸般の事情により、暫くの間休載とさせていただきます。

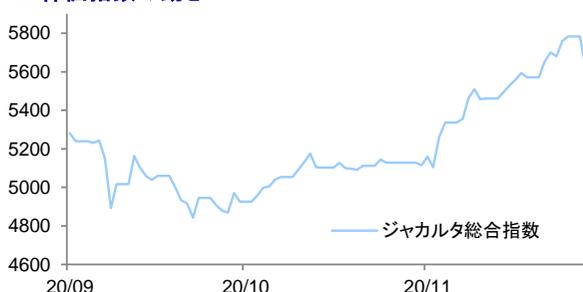
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	CPI(前年同月比)	10月	1.45%	1.44%	1.42%
11/6	外貨準備高	10月	-	133.7	135.2
11/15	貿易収支(USD M)	10月	2204	3607	2390
11/15	輸出(前年比)	10月	-4.36%	-3.29%	-0.85%
11/19	BI 7days リバースレポ金利	-	4.00%	3.75%	4.00%

(資料) ブルームバーク

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 47.25 ~ 48.60
 PHP/JPY 2.150 ~ 2.190

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

11月のドルペソ為替相場は1米ドル＝48.38ペソで取引開始。米大統領選挙がバイデン氏有利、振れ議会の可能性が高まるとリスクオンムードからペソ買い優勢となり、9日には1米ドル＝48.11ペソで取引されて年初来高値を更新。

その後は新型コロナウイルスのワクチン開発に関するポジティブな報道で米ドル金利が上昇、グローバルな為替市場でドル買いとなる中、ドルペソ為替市場もドルが買い戻された。

10日に発表された比第3四半期GDPは▲11.5%で市場予想▲9.6%に届かず。前四半期も▲16.5%から▲16.9%に下方修正されたこともあり、ペソ売り要因となった。

12日は台風の影響でマニラ金融市場は休場となり、米国の追加景気対策について不透明感が漂ったことからリスクオフ地合の中、13日には1米ドル＝48.46ペソまでペソ安が進んだが、悲観的なペソ売りが一巡すると市場は落ち着きを取り戻した。

16日に発表された比9月海外在留フィリピン人労働者送金は前年同月比+9.3%となり、市場予想の同▲4.3%から大幅に乖離したことで年初来ペソ高値更新の期待もあったがペソの上値は重く、17日以降はワクチン開発報道、欧米でのウイルス感染再拡大、米追加経済対策協議再開など材料はあったものの、決め手に欠いて1米ドル＝48.20～48.40ペソで方向感を探る展開に。

月末にかけては米ダウ平均株価指数が史上最高値を更新するなどリスクオン地合の中、月末最終日(27日)に一時1米ドル＝48.055ペソで取引され、1米ドル＝48.06ペソで月の取引を終えた(終値ベースで2016年9月23日以来のペソ高値水準)。

■ 今月の見通し

左記の通り、フィリピン中銀はペソの政策金利を0.25%ポイント引き下げた。今年に入り計2%ポイントの利下げを行い、ペソの政策金利は過去最低の2%となった。

中銀は、GDPの低迷、経済活動再開の中で直近上陸した複数の台風がもたらした被害の深刻さを考慮して景気下支えのために利下げを決定。インフレ予測については今年は2.4%とし、21年2.7%、22年2.9%とした。中銀のインフレターゲット(2～4%)に収まる見通しであるが年内の金融緩和はさすがに打ち止めか。

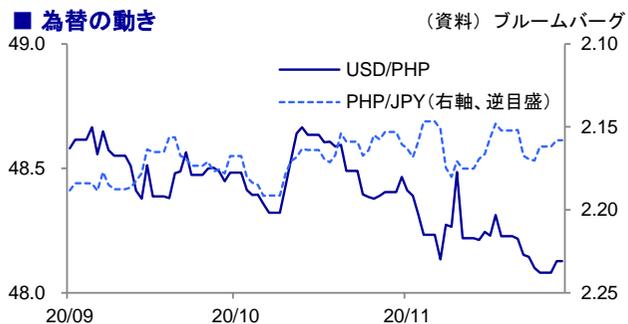
ジョクノ中銀総裁は金融政策の限界と財政出動の必要性についてコメントしたが、財政出動によるペソ金利が急騰するイメージは持ちづらいためペソ売り圧力は限定的となる。

利下げや米株の堅調地合を受けて先月のフィリピン株指数は一時7200ポイント台を回復して今年2月の水準まで戻した。月末終値は利益確定の売りに抑られ、7000ポイントを割り込んで取引終了となったがモメンタムは強そう。

COVID-19ワクチン開発についてのポジティブな報道は米金利上昇に繋がり、ドルペソ為替市場ではドル高に作用もするが、ニューノーマルへの期待感からリスクオン相場が勝り年末に向けては一段のペソ高を予想している。

11月最終週は1米ドル＝48ペソ割れを試したが材料難だった印象。今月は季節要因(海外在留フィリピン人労働者送金)でペソ高バイアスが高まる。ゲームチェンジャーがなければ月初早々にペソの高値を探りにいく展開になりそう。

■ 為替の動き



■ 株価指数の動き



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
 上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
----	----	----	----

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 71.50 ~ 75.50
INR/JPY 1.36 ~ 1.43

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【11月の米ドル/インドルピーは上値の重い推移となった。】
欧州のロックダウン再開を嫌気してリスクオフからドルに資金が集中、ドルインデックスが1か月ぶり高値水準まで上昇。ムンバイ三連休明けの11/2は前営業日比大きくドル高/ルピー安である74.47で月初取引をスタート。米国大統領選挙の開票が行われ、不正があったなどの観測が聞かれる中、リスク回避の動きから4日には当月の高値となる75.00をタッチ。ただ、その後はバイデン氏優位との報道に加え、米上下院がねじれることによって大規模財政出動期待が後退しそれと共に金融緩和期待が浮上したことからリスク選好ムードが強まり、新興国に資金が流入する展開。人民元が対米ドルで28か月ぶりの高値となるなどアジア通貨全般が浮上する中、ドル/ルピーも当月の安値となる73.825を示現。

その後米製薬大手のワクチン試験のヘッドラインに全世界的にリスク資産が強烈に買われる展開になったが、とかくルピーはドル買い/ルピー売りの介入が大規模に入ったことから、むしろルピー安になる展開。陽線続きの登り一本調子で13日には74.705まで戻りを試した。

17日週以降もドル安の流れは続き、ドルインデックスは2年ぶり水準の安値圏となるが、ルピー高の反応は鈍く、インド当局による為替介入が市場のメントピックでルピー高には進みづらい様子。ただし、この間インド株式市場は史上最高値を更新し、海外からの投資資金が大幅に流入、単月の流入金額が最高額となるなど、ドル売り/ルピー買いのフローも意識され、74.00近辺まで徐々に低下する展開。74割れにはもたついたが、月末にかけて製薬三社による前向きな臨床試験報告に加え、財政出動に肯定的なイエレン前FRB議長が財務長官に抜擢されたとのヘッドラインにドル/ルピーは73台に突入。27日執筆時点で73.82レベルでの推移となっている。

■ 今月の見通し

【12月の米ドル/インドルピーは方向感の出ない展開を想定】
既述のように、11月の一週目は大統領選挙通過とワクチン開発のヘッドラインを材料として新興国へ資金が反転・流入、米ドルのインデックスは2年ぶり安値となる一方で、アジア通貨は全面高となった。また、この間インド株式市場は史上最高値を更新、外国人投資家による純資金流入額は23日までに80億ドルに到達しており、こちらも月間ベースでは過去最高額となっており、大規模なルピー買いが想起される。しかしながら、全世界的にリスク選好ムードになったにも関わらず、あるいは外国人投資家が大量にルピーを買ったにも関わらず、ドル/ルピーは下落しなかった。

ルピー高に振れていかない背景としてはインド当局の為替介入があり、10月150億ドル以上外貨準備高を増やしたインド中銀は11月は13日までに120億ドルの更なる積み増しを行っている。6週間で2.8兆円を超える規模のルピー売り/外貨買いを行っている算段で、これがなくならない限りルピーの上昇シナリオは描けないというのが本音だ。残る議論の余地はドル/ルピーのどの水準まで当局が許容するのか(=為替介入を大規模実施してくるレート)ということである、市場参加者の間では11/9の水準である73.85や、10/23以降防衛されている73.50という声強いが当局が何を考えているのか予想するのは正直難しい。マーケットメカニズムを無視した官製相場の様相となり、物価や金利環境、経済指標などのファンダメンタルズ分析よりも当局の動きばかりを見に行くつまらない相場だ。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の年末年始の過ごし方』
日本の年末年始といえば年越し蕎麦を食べたり初詣をしたり初日の出を見たりなど思い浮かべられることがたくさんありますが、インドには年末年始といえばこれだ！というものはなく、年末年始を特別視している方は少ないようです。ただ近年では、若者が多くなってきていることやイベントサービスも増えてきていることから、ニューイヤーパーティーのようなものが若者の間で定着してきているようです。一方でご年配の方々は年も越さずに寝てしまうのがほとんどなのだとか。
そんな中でインド在住の日本の方々は、紅白を皆で観賞したりと良い年末を過ごせるように工夫をして過ごしております。日本食レストランでも紅白をスクリーンに投影しているところもあるそうで、異国で年末の日本を感じられるのはとても嬉しいですね。
コロナで思うような生活ができない毎日ですが、健康で新年を迎えられることを願うばかりです。(インド営業部 ニューデリー 七戸)

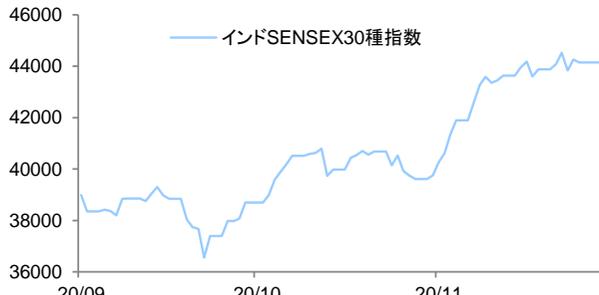
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	製造業PMI	10月	-	58.0	54.6
11/12	鉱工業生産	9月	-1.90%	0.20%	-7.40%
11/12	CPI	10月	7.31%	7.61%	7.27%
11/13	貿易収支	9月	-88億ドル	-87億ドル	-27億ドル

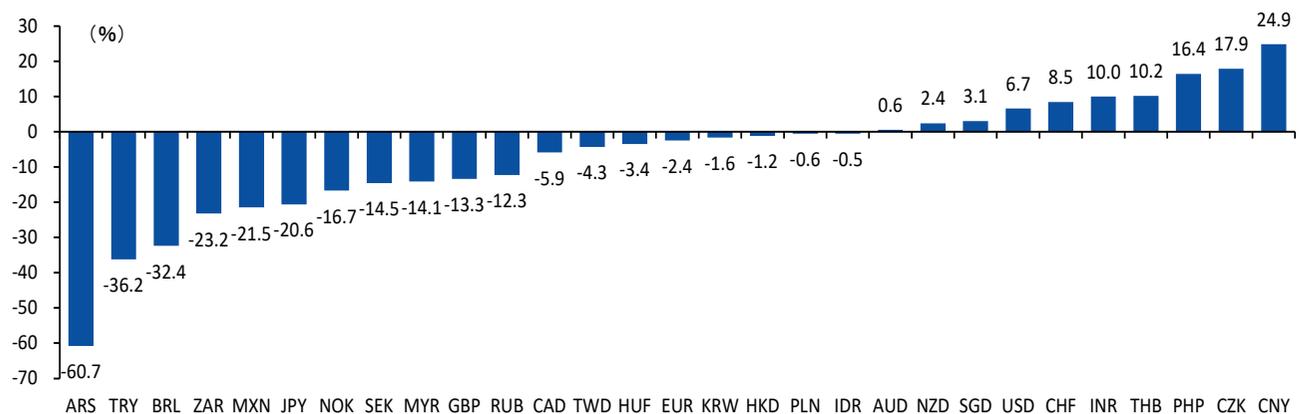
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2019年末	2020年11月末	騰落率	株式市場	2019年末	2020年11月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	28538.44	29638.64	3.9%	-
日本	USD/JPY	108.61	104.31	-4.0%	日経平均株価	23656.62	26433.62	11.7%	16.3%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1213	1.1927	6.4%	ドイツDAX指数	13249.01	13291.16	0.3%	0.3%
英国	GBP/USD	1.3257	1.3323	0.5%	ロンドンFTSE100指数	7542.44	6266.19	-16.9%	-17.3%
豪州	AUD/USD	0.7021	0.7344	4.6%	S&P/ASX200指数	6684.075	6517.807	-2.5%	-6.8%
カナダ	USD/CAD	1.299	1.3001	0.1%	S&Pトロント総合指数	17063.43	17190.25	0.7%	0.7%
エマーゼンゲアジア									
中国	USD/CNY	6.9632	6.5789	-5.5%	上海総合	3050.124	3391.755	11.2%	17.7%
香港	USD/HKD	7.7914	7.7514	-0.5%	香港ハンセン	28189.75	26341.49	-6.6%	-6.1%
インド	USD/INR	71.38	74.0475	3.7%	インドSENSEX30種	41253.74	44149.72	7.0%	3.2%
インドネシア	USD/IDR	13866	14120	1.8%	ジャカルタ総合	6299.539	5612.415	-10.9%	-12.5%
韓国	USD/KRW	1155.84	1106.45	-4.3%	韓国総合株価	2197.67	2591.34	17.9%	23.2%
マレーシア	USD/MYR	4.091	4.0738	-0.4%	ブルサマレーシアKLCI	1588.76	1562.71	-1.6%	-1.2%
フィリピン	USD/PHP	50.655	48.127	-5.0%	フィリピン総合	7815.26	6791.46	-13.1%	-8.5%
シンガポール	USD/SGD	1.3459	1.3416	-0.3%	シンガポールST	3222.83	2805.95	-12.9%	-12.7%
台湾	USD/TWD	29.991	28.565	-4.8%	台湾加権	11997.14	13722.89	14.4%	20.1%
タイ	USD/THB	29.705	30.285	2.0%	タイSET	1579.84	1408.31	-10.9%	-12.6%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2020年10月時点)



■ 実質GDP成長率

	2019Q1	2019Q2	2019Q3	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2018	2019
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.9	1.5	2.6	2.4	-5.0	-31.4	33.1	3.0	2.2
日本*	2.9	1.6	0.2	-7.1	-2.3	-28.8	21.4	0.3	0.7
ユーロ圏	1.5	1.3	1.4	1.0	-3.3	-14.8	-4.4	1.9	1.3
英国	1.7	1.3	1.0	1.0	-2.1	-21.5	-9.6	1.3	1.3
豪州	1.7	1.6	1.8	2.3	1.6	-6.3		2.8	1.9
カナダ*	1.2	3.2	1.1	0.6	-8.2	-38.7		2.0	1.7
エマーゼンジア									
中国	6.4	6.2	6.0	6.0	-6.8	3.2	4.9	6.7	6.1
香港	0.7	0.4	-2.8	-3.0	-9.1	-9.0	-3.5	2.8	-1.2
インド	5.7	5.2	4.4	4.1	3.1	-23.9	-7.5	8.0	8.3
インドネシア	5.1	5.1	5.0	5.0	3.0	-5.3	-3.5	5.2	5.0
韓国	1.8	2.1	2.0	2.3	1.4	-2.7	-1.1	2.9	2.0
マレーシア	4.5	4.8	4.4	3.6	0.7	-17.1	-2.7	4.7	4.3
フィリピン	5.7	5.4	6.3	6.7	-0.7	-16.9	-11.5	6.3	6.0
シンガポール	1.0	0.2	0.7	1.0	-0.3	-13.3	-5.8	3.5	0.7
台湾	1.9	2.9	3.3	3.7	2.5	0.4	3.9	2.8	2.7
タイ	2.9	2.4	2.6	1.5	-2.0	-12.1	-6.4	4.2	2.4

(注)インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	20/03	20/04	20/05	20/06	20/07	20/08	20/09	20/10	2018	2019
	(%)								(%)	
先進国										
米国	4.4	14.7	13.3	11.1	10.2	8.4	7.9	6.9	3.9	3.7
日本	2.5	2.6	2.9	2.8	2.9	3.0	3.0	3.1	2.4	2.4
ユーロ圏	7.2	7.4	7.6	7.9	8.1	8.3	8.3		8.2	7.6
英国	4.0	4.0	4.1	4.1	4.3	4.5	4.8		4.1	3.8
豪州	5.2	6.4	7.1	7.4	7.5	6.8	6.9	7.0	5.3	5.2
カナダ	7.8	13.0	13.7	12.3	10.9	10.2	9.0	8.9	5.8	5.7
エマーゼンジア										
中国	3.7			3.8					3.8	3.6
香港	4.2	5.2	5.9	6.2	6.1	6.1	6.4	6.4	2.8	2.9
インド						7.1			5.2	5.2
インドネシア										
韓国	3.8	3.8	4.5	4.3	4.2	3.2	3.9	4.2	3.8	3.8
マレーシア	3.9	5.0	5.3	4.9	4.7	4.7	4.6		3.3	3.3
フィリピン		17.7			10.0				5.3	5.1
シンガポール	2.4			2.8					2.1	2.3
台湾	3.8	4.1	4.2	4.0	3.9	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7
タイ	1.0	2.2	1.9		2.2	1.9	1.8	2.1	1.1	1.0

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	20/02	20/03	20/04	20/05	20/06	20/07	20/08	20/09	20/10	2018	2019
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	2.3	1.5	0.3	0.1	0.6	1.0	1.3	1.4	1.2	2.4	1.8
日本	0.4	0.4	0.1	0.1	0.1	0.3	0.2		-0.4	1.0	0.5
ユーロ圏	1.2	0.7	0.3	0.1	0.3	0.4	-0.2	-0.3	-0.3	1.8	1.2
英国	1.7	1.5	0.8	0.5	0.6	1.0	0.2	0.5	0.7	2.5	1.8
豪州		2.8			-0.3			0.7		1.9	1.6
カナダ	2.2	0.9	-0.2	-0.4	0.7	0.1	0.1	0.5	0.7	2.3	1.9
エマーゼンジア											
中国	5.2	4.3	3.3	2.4	2.5	2.7	2.4	1.7	0.5	2.1	2.9
香港	2.2	2.3	1.9	1.5	0.7	-2.3	-0.4	-2.2	-0.2	2.4	2.9
インド	6.6	5.8	7.2	6.3	6.2	6.7	6.7	7.3	7.6	4.0	3.7
インドネシア	3.0	3.0	2.7	2.2	2.0	1.5	1.3	1.4	1.4	3.2	2.8
韓国	1.1	1.0	0.1	-0.3	0.0	0.3	0.7	1.0	0.1	1.5	0.4
マレーシア	1.3	-0.2	-2.9	-2.9	-1.9	-1.3	-1.4	-1.4	-1.5	1.0	0.7
フィリピン	2.6	2.5	2.2	2.1	2.5	2.7	2.4	2.3	2.5	5.2	2.5
シンガポール	0.3	0.0	-0.7	-0.8	-0.5	-0.4	-0.4	0.0	-0.2	0.4	0.6
台湾	-0.2	0.0	-1.0	-1.2	-0.8	-0.5	-0.3	-0.6	-0.2	1.4	0.6
タイ	0.7	-0.5	-3.0	-3.4	-1.6	-1.0	-0.5	-0.7	-0.5	1.1	0.7

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2019Q1	2019Q2	2019Q3	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2018	2019
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.3	-2.4	-2.4	-2.2	-2.2	-2.6		-2.2	-2.2
日本	3.6	3.5	3.5	3.7	3.7	3.1	3.1	3.6	
ユーロ圏	2.7	2.2	2.2	2.3	2.0	2.2		2.9	2.3
英国	-4.5	-4.7	-4.9	-4.3	-3.6	-2.8		-3.9	
豪州	-1.7	-0.8	0.1	0.6	1.2	1.8		-2.1	
カナダ	-2.6	-2.3	-2.4	-2.0	-1.9	-1.9		-2.5	-2.1
エマーゼンジア									
中国	0.7	0.9	1.1	1.0	0.6	1.1	1.5	0.2	
香港	4.3	5.0	5.9	6.1	4.9	5.9		4.3	
インド	-2.1	-2.1	-1.6	-1.0	-0.8	0.4		-2.4	-1.0
インドネシア	-3.0	-3.0	-2.9	-2.7	-2.4	-2.1	-1.3	-2.9	-2.7
韓国	4.7	4.3	3.8	3.7	3.8	3.6	3.8	4.5	
マレーシア	2.4	3.1	3.6	3.3	2.8	2.5	3.5	2.3	
フィリピン	-2.6	-1.5	-1.0	-0.1	0.3	1.5		-2.3	
シンガポール	16.9	17.3	17.0	17.0	16.8	16.1	16.3	17.2	17.0
台湾	11.0	10.9	11.3	10.6	10.4	10.7	12.7	11.6	10.6
タイ	5.1	5.1	6.2	6.8	6.2	5.7		5.6	

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

	現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向		
		日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項	
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.00-0.25	緩和: 2019/7/31	2.25-2.50	2020/3/15	-100bp	2020/11/5	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2020/9/17	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5bp	2020/9/10	現状維持
英国	バンク・レート	0.10	緩和: 2020/3/11	0.75	2020/3/19	-15bp	2020/11/5	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	0.10	緩和: 2011/11/1	4.75	2020/11/3	-15bp	2020/11/3	-15bp
カナダ	翌日物金利	0.25	緩和: 2020/3/4	1.75	2020/3/27	-50bp	2020/9/9	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利(LPR)	3.85	緩和: 2012/6/8	6.31	2020/4/20	-20bp	2020/11/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	4.00	緩和: 2019/2/7	6.50	2020/5/22	-40bp	2020/10/9	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	3.75	緩和: 2019/7/18	6.00	2020/11/19	-25bp	2020/11/19	-25bp
韓国	7日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/7/18	1.75	2020/5/28	-25bp	2020/11/26	現状維持
マレーシア	翌日物金利	1.75	緩和: 2019/5/7	3.25	2020/7/7	-25bp	2020/11/3	現状維持
フィリピン	翌日物金利	2.00	緩和: 2019/5/9	4.75	2020/11/19	-25bp	2020/11/19	-25bp
タイ	翌日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/8/7	1.75	2020/5/20	-25bp	2020/11/18	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	4.00	緩和: 2012/3/12	15.00	2020/10/1	-50bp	2020/10/1	-50bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行